

内閣府青年国際交流事業報告書

令和7年度 第37回 「世界青年の船」事業



内閣府

内閣府青年国際交流事業報告書

令和7年度 第37回 「世界青年の船」事業



略語一覧

「世界青年の船」事業	Ship for World Youth Program	SWY
参加青年	Participating Youth	PY
日本参加青年	Japanese Participating Youth	JPY
外国参加青年	Foreign Participating Youth	FPY
既参加青年	Ex-Participating Youth	Ex-PY
管理部員	Administration	ADM
ナショナル・リーダー	National Leader	NL
サブ・ナショナル・リーダー	Sub-National Leader	SNL
ユース・リーダー	Youth Leader	YL
アシスタント・ユース・リーダー	Assistant Youth Leader	AYL
グループ・リーダー	Group Leader	GL
アシスタント・グループ・リーダー	Assistant Group Leader	AGL
コース・ディスカッション	Course Discussion	CD
ピア・ラーニング・セミナー	Peer-Learning Seminar	PLS
ナショナル・プレゼンテーション	National Presentation	NP
寄港地活動	Port of Call Activity	POC
地域訪問活動	Cultural Experience Session	CES
地域実践活動	Project Based Learning Session	PBL
「世界青年の船」事業事後活動組織	Ship for World Youth Alumni Association	SWYAA
日本青年国際交流機構	International Youth Exchange Organization of Japan	IYEO

内閣府青年国際交流事業報告書
令和7年度 第37回
「世界青年の船」事業

目次

略語一覧	2
カラーグラビア	5
第1章 事業の概要	
1. 経緯及び内容	24
2. 令和7年度事業の概要	24
第2章 事業の実施	
1. コース・ディスカッションの成果	28
1.1. コース・ディスカッション	29
1.2. 地域実践活動	50
1.3. サマリー・フォーラム	53
2. 地域訪問活動	54
3. ナショナル・プレゼンテーション	57
4. ピア・ラーニング・セミナー	61
5. 委員会活動	66
5.1. クラブ活動委員会	66
5.2. ディスカッション委員会	66
5.3. イベント委員会	66
5.4. ナショナル・プレゼンテーション委員会	67
5.5. ピア・ラーニング・セミナー委員会	67
6. クラブ活動	67
7. 事後活動セッション	68
8. 佐藤啓内閣官房副長官表敬訪問	70
9. 佳子内親王殿下御引見	70
10. 管理官報告	71
関係資料	
1. 参加青年の構成	74
2. 航路図	75
3. 参加者一覧	76
4. 事後活動	96
5. 既参加青年による事後活動組織設立への動きとその歴史	96
6. SWYAA国際連盟について	98
7. 事業実績	100
8. にっぽん丸船内配置図	105

令和7年度 第37回 「世界青年の船」事業

佳子内親王殿下御引見 (令和8年3月12日)



各国ナショナル・リーダー、サブ・ナショナル・リーダー、参加青年代表者

佐藤啓内閣官房副長官表敬訪問 (令和8年3月12日)



各国ナショナル・リーダー、サブ・ナショナル・リーダー、参加青年代表者

日本参加青年事前研修 (令和7年9月12日～9月16日)



ディスカッションを練習する日本参加青年



既参加青年と交流する日本参加青年



沖縄県東京事務所長による県勢説明



愛知県職員による県勢説明

参加青年集合 (タイ) (令和8年2月15～16日)



日本参加青年在タイ日本国大使館表敬訪問



オリエンテーションを聞く参加青年

船上プログラム (令和8年2月16日～3月8日)

出航式 (令和8年2月16日)



管理官による挨拶



日本・アシスタント・ユースリーダーが参加青年を代表して挨拶



在タイ日本国大使館大鷹正人大使との記念写真



各国ナショナル・リーダーによる記念撮影

コース・ディスカッション



ディスカッションを行う参加青年



発表を行う参加青年

ナショナル・プレゼンテーション



カメルーン



カナダ



チリ



ドミニカ共和国



ギリシャ



ジャマイカ



日本



モンゴル



モザンビーク



ニュージーランド



パラオ



スペイン

ピア・ラーニング・セミナー



医療制度に関する世界的視点・日本



パブリックスピーキング・ギリシャ



教育の公平性・ジャマイカ



宇宙産業の遺産と将来・チリ



サステナビリティと健康について・スペイン



持続可能な未来を創るための知恵の共有・モンゴル



Well-beingについて・ドミニカ共和国



カメルーンの多様な文化・カメルーン

クラブ活動



チリ・ダンス



ドミニカ共和国・Dominican Spanish 101



ギリシャ・ダンス



モンゴル・カリグラフィー



モザンビーク・ダンス



ニュージーランド・ハカ



スペイン・ボードゲーム



日本・お琴クラブ

LGアクティビティ



LGでアイスブレイクをおこなう



LGで全力で綱引きを楽しむ

寄港地活動 沖縄県（令和8年2月23日～2月25日）

表敬訪問（令和8年2月23日）



管理官から玉城デニー沖縄県知事へギフト贈呈



集合写真

船上レセプション（令和8年2月23日）



玉城デニー沖縄県知事による挨拶



スペイン・ユース・リーダーが参加青年を代表して挨拶



ドミニカ共和国によるギフト贈呈



集合写真（全参加者）

地域訪問活動



首里城にて地元中学・高校生から英語で説明を受ける



平和ワークショップ



さんご畑にてマイクロプラスチックの説明を聞く(LG-K, LG-N)



月桃の葉を使ったワークショップ(LG-A, LG-B)



エイサーの練習をする青年(LG-C, LG-M)



大漁旗にデザインをする青年(LG-D, LG-L)



島豆腐を作る青年(LG-E, LG-H)



マングローブの間引き体験(LG-F, LG-I)



沖縄尚学高等学校にて茶道体験(LG-G, LG-J)



OISTにて学生等と交流



OIST事務局員から話を聞く青年



フェアウェルセレモニー

寄港地活動 愛知県 (令和8年2月28日～3月4日)

船上レセプション (令和8年3月1日)



大村秀章愛知県知事による挨拶



ジャマイカ・ユース・リーダーが参加青年を代表して挨拶



広沢一郎名古屋市長による乾杯の挨拶



集合写真 (全参加者)

地域実践活動



地域理解研修・トヨタ産業博物館の見学



グローバルイノベーターズサミット



(CD-1) 瀬戸蔵ミュージアムにて説明を聞く



(CD-1) 脱炭素・再エネ導入に関する議論



(CD-2) 愛・地球博記念館見学



(CD-2) ジブリパークにて集合写真



(CD-3) セントレア空港での防災対策を聞く



(CD-3) 名古屋大学減災館にて南海トラフの説明を聞く



(CD-4) JUNTOSの方との交流



(CD-4) トヨタ会館にてシミュレーション体験



(CD-5) 地域の起業家を支援する旅館平野屋にて、社長及び起業家の皆さんと



(CD-5) なごのキャンパスにて取組を聞く参加青年



(CD-6) 日本の教育に関するレクチャー



(CD-6) 教育の課題を聞く参加青年



(CD-7) 魅力的なまちづくりに関する議論をする参加青年



(CD-7) なごや寺町にてまちづくりの意見交換



(CD-8)INAXライブミュージアムの見学



(CD-8) 株式会社スズサンにて商品の説明を聞く

地域実践活動成果発表 (令和8年3月4日)



成果発表をする参加青年



司会をするディスカッション委員

事後活動セッション (令和8年3月6日～3月7日)



SWYAA代表者から事後活動組織の説明を聞く



ファシリテーターからプロジェクトマネジメントに関するレクチャーを受ける

帰港交歓会 (令和8年3月8日)



歓談中の参加青年①



歓談中の参加青年②



モンゴル・ナショナル・リーダーが参加国を代表して挨拶



パラオ・ナショナル・リーダーが参加国を代表して挨拶

帰港式(令和8年3月9日)



津島内閣府副大臣挨拶



チリ・ユース・リーダーが参加青年を代表して挨拶



ギリシャ・ユース・リーダーが参加青年を代表して挨拶



津島内閣府副大臣、水野政策統括官、南大臣官房審議官、にっぽん丸船長、各国ナショナル・リーダーによる記念撮影



津島内閣府副大臣とニュージーランド・ナショナル・リーダーによる記念品交換



帰港式に出席する参加青年

東京プログラム (令和8年3月9日～3月12日)

サマリー・フォーラム (令和8年3月12日)



CDの成果を発表する参加青年①



CDの成果を発表する参加青年②



CDの成果を発表する参加青年③



発表を聞く参加青年

解散式 (令和8年3月12日)



津島内閣府副大臣による挨拶



日本・ユース・リーダーが参加青年を代表して挨拶



ユース・リーダーが参加青年を代表して修了書を受け取る



津島内閣府副大臣、水野政策統括官、南大臣官房審議官と、全参加青年による記念撮影

日本参加青年事後研修 (令和8年3月13日～3月14日)



事後活動の事例を聞く日本参加青年



修了証授与での管理官挨拶

参加者の顔ぶれ

ナショナル・リーダー



各国ナショナル・リーダー

参加国



カメルーン



カナダ



チリ



ドミニカ共和国



ギリシャ



ジャマイカ



モンゴル



モザンビーク



ニュージーランド



パラオ



スペイン



日本

ファシリテーター



事後活動セッション担当者



管理部



全参加者



にっぽん丸クルー



第1章

事業の概要

1 経緯及び内容

(1) 経緯

「世界青年の船」事業は、昭和42(1967)年度に明治百年記念事業の一つとして開始された「青年の船」事業に由来し、発展的に改組されてきたものである。

(2) 内容

日本及び外国の青年が船内での生活や寄港地における活動を共にしながら、各国が共通して抱える社会課題の研究・ディスカッションや各種の交流活動を行う場を提供することにより、日本青年を、国際的視野を備え、国際社会・地域社会が抱える課題の解決に向けて指導性を発揮できる人材へと育成するとともに、青年相互の友好と理解を促進し、国際親善を図る。

2 令和7年度事業の概要

(1) 交流国

カメルーン共和国、カナダ、チリ共和国、ドミニカ共和国、ギリシャ共和国、ジャマイカ、モンゴル国、モザンビーク共和国、ニュージーランド、パラオ共和国、スペイン王国(11か国)

(2) 参加者

- ・ ナショナル・リーダー(NL)(各国1名)
- ・ サブ・ナショナル・リーダー(SNL)(日本のみ、1名)
- ・ 日本参加青年(78名)
- ・ 外国参加青年(各国8名×10か国、ジャマイカ5名)

(3) コース・ディスカッションのテーマ

- ① Climate Change Action and Sustainable Energy
- ② Entertainment for Well-Being
- ③ Risk Management for Natural Disasters
- ④ Social Inclusion
- ⑤ Startups and Impact Investment
- ⑥ Education in Local Community
- ⑦ Community Design
- ⑧ Inheritance of Traditional Culture

(4) 使用船舶

「にっぽん丸」(商船三井クルーズ)

(5) 日程及び主な活動

① 事前研修

日程: 令和7年9月12日(金)～16日(火)(5日間)
場所: 国立オリンピック記念青少年総合センター
対象: 日本参加青年
主な活動: ディスカッション講座、リーダーシップセミナー、各プログラムに関する説明、既参加青年からの引継ぎ 等

② 本体プログラム

日程: 令和8年2月15日(日)～3月12日(木)(26日間)
対象: 日本参加青年及び外国参加青年
航路: タイ(バンコク)～沖縄～愛知～東京
主な活動:
(ア) 船上プログラム(令和8年2月16日(月)～3月9日(月)(22日間))
i. 船上プログラム(下記ii及びiiiを除く期間(14日間))
場所: 船上
主な活動: ディスカッション、文化交流 等
ii. 地域訪問活動(CES)(令和8年2月23日(月・祝)～25日(水)(3日間))
場所: 沖縄県
主な活動: 施設訪問、視察、文化体験、地元青年との交流 等
iii. 地域実践活動(PBL)(令和8年2月28日(土)～3月4日(水)(5日間))
場所: 愛知県
主な活動: 地域の社会課題の解決に向けた実践活動(地元企業・NPO等における体験・意見交換等)

(イ) 東京プログラム(令和8年3月9日(月)～12日(木)(4日間))

場所: 国立オリンピック記念青少年総合センター 等
主な活動: 御引見、内閣官房副長官表敬、成果発表、解散式 等

③ 事後研修

日程: 令和8年3月13日(金)～14日(土)(2日間)
場所: 国立オリンピック記念青少年総合センター
対象: 日本参加青年
主な活動: 振り返り、事後活動についての説明 等

(6) 経費負担

以下の経費については、原則として日本政府が負担。

- ① 船の運航に要する経費（備船料等）
- ② 日本参加青年が本事業に参加するための、羽田空港とスワンナプーム国際空港の間（往路）のエコノミー・クラスの航空料金
- ③ 外国参加青年及びNL並びに外国在住のファシリテーターが、本事業に参加するための、内閣府が指定する自国内における最寄りの国際空港と、スワンナプーム国際空港の間（往路）、羽田空港又は成田空港の間（復路）のエコノミー・クラスの航空料金
- ④ 外国参加青年、NL、SNL及びファシリテーターの本事業期間中の疾病、事故等に対する保険料
- ⑤ 日本NL及びSNLが、本事業に参加するための国内往復交通費
- ⑥ 日本参加青年が本事業に参加するために必要な国内往復交通費
- ⑦ 本事業における、定められた日程に基づく見学等に要する交通費、入場料、宿泊費及び食費
- ⑧ 事後活動組織の代表者が、事後活動セッションに参加するための、内閣府が指定する自国内における最寄りの国際空港と、中部国際空港の間（往路）、羽田空港又は成田空港と、自国内における最寄りの国際空港の間（復路）のエコノミー・クラスの航空料金
- ⑨ その他、事業を実施するために内閣府が必要と認める経費

第2章

事業の実施

1 コース・ディスカッションの成果

コース・ディスカッション (CD) とは、各国のPYが、希望に基づきコースに分かれ、ファシリテーターの指導の下に行われるディスカッション・プログラムである。PYは、8コースのそれぞれ異なる、多くの国が直面している共通の課題に関するアカデミックなテーマについて、ディスカッションに取り組んだ。各コースは、19～21名のPYで構成され、PYはCDを通して各テーマの実情について理解を深め、課題解決方法を考えた。また、PYが率直かつ活発な意見交換を通じ、相互理解の促進、文化の異なる集団の中でのコミュニケーション能力を身に付けることも目的とした。

コース・ディスカッションの主な流れは、以下のとおりである。

- (1) 令和8年2月16日～3月9日：船上プログラム
 - CDミーティング 75分×1コマ
 - CD 150分×7コマ
- (2) 令和8年2月28日～3月4日：地域実践活動 (PBL) (愛知県)
 - 各コースのディスカッション・テーマに即した愛知県内の関連施設訪問
 - ローカル・ユースや有識者等と意見交換
 - 地域実践活動 (PBL) での学びや愛知県が抱える課題に対する改善策等の成果発表 (10分×8コース)
- (3) 令和8年3月9日～12日：東京プログラム
 - サマリー・フォーラム準備
 - サマリー・フォーラム (10分×8コース)

ファシリテーター

コース・ディスカッション	氏名	国籍
1. Climate Change Action and Sustainable Energy	Mr. Pheakkdey Nguon	カンボジア
2. Entertainment for Well-Being	Mr. Tan Onwimon	タイ
3. Risk Management for Natural Disasters	Mr. Maximiliano Montoya Gonzalez	メキシコ
4. Social Inclusion	Ms. Lillian Solheim	ノルウェー
5. Startups and Impact Investment	Ms. Tania Francis	メキシコ/アメリカ
6. Education in Local Community	Ms. Seon Mi Jang	カナダ
7. Community Design	Mr. Ari Yuda Laksana	インドネシア
8. Inheritance of Traditional Culture	Ms. Priscilla Madrid Valero	メキシコ

1.1. コース・ディスカッション

CD-1 Climate Change Action and Sustainable Energy

Facilitator: Pheakkdey Nguon

Number of PYs: 20

(1) Discussion Goals and Objectives

By the end of the CD, PYs will be able to:

- Understand the nexus of climate change and sustainable energy challenges and opportunities through global, national, and local perspectives and case studies.
- Explain how human activities drive climate change and translate into ecosystem, health, infrastructure, agriculture and livelihood impacts.
- Identify mitigation and adaptation options across sectors and compare them based on feasibility and impacts.
- Develop problem-solving skills using systems thinking and root cause analysis by applying Problem Driven Iterative Adaptation (PDIA) to construct solutions.
- Build teamwork, public speaking, cross-cultural communication, and capacity.

(2) Program Onboard

Course Discussion Session [1] Climate and Energy Nexus in Your Country	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> • Agree on ground rules for the CD sessions, emphasising respect and mutual support. • Learn from peers about national climate and energy challenges in their countries. • Examine how climate and energy challenges are interconnected with other sectors such as infrastructure, ecosystems, agriculture, health, and governance. 	<ul style="list-style-type: none"> • Case study presentations by PYs focusing on drivers, impacts, responses to climate and energy challenges in their countries. • Thematic clustering of PYs assignments: energy transition, climate extremes, food systems, and ecosystem degradation. • Identification of systemic interconnections: fossil dependence → emissions → heatwaves → infrastructure stress → policy responses.

Course Discussion Session [2] Responses to Climate and Energy Challenges	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> • Understand scientific basis of climate change including human-driven emissions and their impacts on ecosystems and economies. • Identify mitigation and adaptation pathways across major sectors to reduce emissions and strengthen resilience to climate impacts. • Compare sectoral solutions and recognise the need for coordinated actions. 	<ul style="list-style-type: none"> • Review main drivers of emissions and examine sectoral contributions, with particular attention to the dominant role of energy, industry, transport, and buildings. • Analyse mitigation pathways across energy sector including renewable energy. • Discuss complementary roles of mitigation and adaptation, emphasising the need to strengthen climate resilience.

Course Discussion Session [3] Energy Sources: Biomass and Hydrogen	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Understand the fundamentals of biomass and hydrogen as alternative energy sources. ● Assess their decarbonisation potential and trade-offs, considering environmental impacts, production methods and context. ● Apply knowledge in a town planning simulation, where PYs assess energy choices. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Quiz and introduction to biomass conversion pathways and key concepts. ● Explore hydrogen production methods, with discussion on how different production pathways influence emissions profiles. ● SWY town role-play with planners, environmental advocates, community representatives, policy advisors, and economic analysts.

Course Discussion Session [4] Systems Thinking and Policy Analysis	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Define what is a policy and examine why policies often fail. ● Construct problems using underlying cause analysis, to enable PYs to break complex challenges into root causes using tools from the Problem Driven Iterative Adaptation (PDIA). 	<ul style="list-style-type: none"> ● Discuss key policy elements and identify factors leading to policy failure, such as imported solutions, unrealistic expectations, fragmented governance structures, and weak collaboration among stakeholders. ● Construct problems using PDIA framework, where PYs practice defining complex challenges clearly and identifying root causes to develop context-driven solutions.

Course Discussion Session [5] Problem Deconstruction and Ishikawa Diagram	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Transform environmental challenges into analytical problem questions. ● Deconstruct root causes of complex problems using structured methods. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Converting problem-as-question exercise. ● Application of Ishikawa diagram. ● Introduction of field learning objectives: urban regeneration, biomass utilization, industrial decarbonization.

Course Discussion Session [6] Change Space Analysis, Action and Iteration Plan	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Apply the change space framework to assess authority, acceptance, and ability for selected root causes, leading to prioritised actions. ● Develop a first iteration plan that identifies entry points, priority stakeholders, and practical next steps for testing solutions. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Decision-making simulation to practice negotiation and problem-solving skills. ● Assessment of Authority, Acceptance, and Ability to assess feasibility of change space. ● Development of iteration plan emphasizing small-scale experimentation, stakeholder engagement, and iterative learning.

Course Discussion Session [7] Summary and Reflections	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Reflect on insights and lessons across all CD sessions as well as learning from Okinawa and Aichi, consolidating understanding of climate change, energy, and the PDIA. ● Synthesise group learning and refine key messages to prepare for the Summary Forum. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Guided group reflection reviewing key concepts and insights from all CD sessions, activities in Okinawa and Aichi. ● Group discussion and synthesis exercise to identify key learning points, collective messages on climate and energy challenges. ● Preparation for the Summary Forum in terms of speakers and presentation slides.

(3) Summary Forum (Presentation of the Discussion Results)

The presentation clearly reflected the depth of learning achieved throughout the Course Discussion on Climate Change Action and Sustainable Energy. It highlighted the interconnected nature of climate and energy challenges, showing how issues such as fossil fuel dependence, climate impacts, ecosystem degradation, and food security are closely linked across sectors and national contexts. The team communicated well how analytical tools such as the PDIA, problem construction, deconstruction, and the Ishikawa diagram helped shift discussions from solution-driven thinking toward a clearer diagnosis of root causes and context-based responses.

What stood out most was the excellent teamwork among the PYs. The preparation for the Summary Forum demonstrated a high level of coordination and mutual support. PYs worked closely together to organise ideas, refine messages, and build a coherent narrative that reflected the diversity of their experiences and perspectives. Those who were not presenting also contributed to the process by listening to the practice and offering constructive inputs. This spirit of collaboration was evident in the clarity of the presentation and the confidence with which speakers contributed.

The presentation also emphasised that sustainable energy transitions require not only technological solutions but also appropriate policies, local resources, and inclusive engagement with communities. Seeing the PYs grow in their analytical thinking, collaboration, and confidence throughout this process has been deeply rewarding. As a facilitator, I am truly proud of their collective effort and the way they supported and strengthened one another.

(4) Facilitator's Comments

The journey of self-development among the PYs throughout the CD was both meaningful and inspiring to observe. From the beginning, the group demonstrated

curiosity, openness, and a genuine willingness to learn from one another. As the program progressed, their analytical thinking, confidence, and collaborative spirit continued to grow. What stood out most was the strong camaraderie within the group. PYs actively supported one another while preparing for key moments such as the Co-Creation Conference and the Summary Forum, exchanging ideas and encouragement. Even during informal moments, whether on the bus or during activities in Okinawa and Aichi, they continued thoughtful discussions that strengthened both their academic perspectives and their social bonds.

PYs learned the importance of coordinated efforts across sectors such as energy, transport, industry, and land use in reducing emissions. At the same time, they recognised that the effectiveness of energy technologies is highly context-dependent, shaped by local resources, infrastructure, economic conditions, and policy environments. Many also emphasised that community engagement and inclusive decision-making are essential for achieving long-term sustainability and public acceptance of renewable energy.

Over time, the PYs' analytical approach evolved from solution-driven thinking to a more problem-driven perspective. The introduction of the PDIA framework encouraged them to begin with a clear diagnosis of locally defined challenges. Through tools such as problem deconstruction and Ishikawa diagrams, their problem statements became more precise and grounded in context, demonstrating stronger causal reasoning. Simulation exercises further strengthened their negotiation and collective decision-making skills, while the Authority, Acceptance, and Ability framework helped them assess the feasibility of reform efforts. Iteration planning encouraged them to translate analysis into practical steps, reinforcing adaptability and continuous learning.

Beyond the CD sessions, the cultural experiences in Okinawa and the PBL in Aichi added valuable depth to the overall journey. The time in Okinawa fostered cultural appreciation and strengthened interpersonal connections

among PYs, while the learning opportunities in Aichi grounded many of the theoretical discussions in real-world examples, helping PYs connect policy concepts with practical implementation.

Overall, this has been an exceptional group of PYs. Their curiosity, teamwork, and commitment to learning from one another created a positive and collaborative atmosphere throughout the course. It has been a privilege to work with such an engaged group, and I am grateful to

have had the opportunity to contribute, even in a small way, to their broader SWY experience. My sincere gratitude to the generosity of the Cabinet Office, Government of Japan, the amazing team from the CENTERYE, the lovely crew of Nippon Maru, the wonderful committee in Okinawa and Aichi and everyone who was involved in making SWY37 such a life transforming experience for the PYs. We did it and we did it extremely well.

CD-2 Entertainment for Well-Being

Facilitator: Tan Onwimon

Number of PYs: 20

(1) Discussion Goals and Objectives

PYs will explore different entertainment and learn to implement well-being into various types of productions to

prove that “entertainment can be more than just fun, but also for social change!”

(2) Program Onboard

Course Discussion Session [1] Entertainment for Kids	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Learning Animation from different countries ● Create well-being message for kids ● Introduction to theatre for children 	<ul style="list-style-type: none"> ● Discussion in Animations Differences ● In 4 groups: Producing theatre for kids

Course Discussion Session [2] Entertainment for Social Change	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Find ways to connect well-being into media ● Critical Thinking in media improvement 	<ul style="list-style-type: none"> ● Discussion in Identity & Value, Social Impact, Health effecting by Entertainments

Course Discussion Session [3] Digital Narrative Design	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Implement technology into well-being ● Collaborating in a long-schedule project 	<ul style="list-style-type: none"> ● Phone App Design for well-being ● Short Film Making (Announcement, due Session 7)

Course Discussion Session [4] Podcast for Mental Health	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Discuss a personal method to heal and improve mental health by entertainment ● Learn to make a healthy conversation 	<ul style="list-style-type: none"> ● Abstract Color & Feeling Matching Exercise ● Podcast Making Discussing well-being (5 mins-long)

Course Discussion Session [5] Nippon Maru Rally & Local Entertainment	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Interactive learning about Aichi's Entertainment & History of Expo 2005 ● Designing a global event ● Seeking ways to improve Entertainment for Local Community's Well-being 	<ul style="list-style-type: none"> ● Aichi Rally (Scan QR Code to find clues!) ● Envision Aichi's Future Olympics ● Discussion on Local Community Problems and Ways to use Entertainment to help

Course Discussion Session [6] Music Therapy	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Introduction to Music Therapy ● Expand Sound Sensory 	<ul style="list-style-type: none"> ● Immersive Soundscape Therapy ● Discussion "How to implement Music Therapy into Entertainment" ● Short Film Production (follow up) ● Preparation for the Summary Forum

Course Discussion Session [7] Short Film Premiere Gala	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Reflections on the Course Discussion ● Showcasing PYs' Short Film ● Boost Confidence for PYs' futures 	<ul style="list-style-type: none"> ● 3 Short Films Screening ● Discussion "How is life on the MS Nippon Maru different from programs held on land? How does this unique experience relate to the concept of Entertainment for Well-Being?" ● Preparation for Summary Forum ● Reflection & Evaluation

(3) Summary Forum (Presentation of the Discussion Results)

At the Summary Forum, the 20 PYs concluded that the ultimate ingredient that can elevate entertainment beyond mere enjoyment and make it supportive of well-being is connection — the ability to bring people together. This insight reflects the PYs' experiences throughout the program, including activities such as the institutional visit to UNIBO in Aichi, as well as the SWY as a whole. The program itself can be seen as an embodiment of Entertainment for Well-Being, creating a form of "ocean therapy" within a confined space that fosters social collaboration and human connection.

Furthermore, PYs from CD-2 reflected that across the seven discussion sessions, they learned to collaborate through various forms of entertainment that can contribute to well-being. These collaborations involved crafting meaningful messages, bringing audiences together, and developing creative solutions. Through this process, the experience also has the potential to shape these 20 PYs as

they move forward in their respective future career paths.

(4) Facilitator's Comments

Throughout the seven sessions, the PYs demonstrated strong engagement, creativity, and thoughtful reflection on the relationship between entertainment and well-being.

In the early discussions [1], PYs explored how media influences society. Many participants observed that most countries consume American media, while their own original animation often carries themes rooted in nature and cultural values. During the theatre activity, PYs created messages for children that emphasized socializing, learning to ask for help, empathy, and even simple habits such as washing hands. Assigning a theatre production on the first day was challenging since the participants had only just met each other, but they responded remarkably well and quickly collaborated.

As the sessions progressed, discussions became more critical and reflective. PYs examined issues such as cancel culture and stereotypical representation in media, while

also considering how community and education can play a role in improving the entertainment industry. These conversations encouraged participants to add deeper social context to their ideas and explore the broader influence of media.

When discussing well-being, PYs identified self-improvement and human connection as their most important needs. This led to an app design activity where participants developed creative concepts, some inspired by Japanese culture. Ideas included “Ghibli Wisdom for Slow Life,” a Traveler Buddy Finder, and a well-being app designed specifically for students. During this session, PYs also began planning their short film project, which continued throughout the remainder of the program and encouraged them to practice time management and collaboration.

The podcast project [4] became another highlight. The conversations felt natural and engaging, showing that PYs were becoming increasingly comfortable with one another. Topics ranged from women’s mental health to hobbies, culture, and small interactive activities. These podcasts were later presented during the final session.

In the Aichi-themed activities, the rally game was extremely engaging. PYs approached it as a competitive challenge while learning interesting facts about Aichi. The “Future Olympics for Aichi” exercise also created a meaningful exchange between Japanese PYs (JPYs) and foreign PYs (FPYs). JPYs provided cultural and local perspectives, while FPYs expanded on these ideas with broader international viewpoints. This created a collaborative and symbiotic dialogue between participants. After this session, PYs organized Ghibli movie night at Mermaid Theatre, hosted by the CD-2 PYs. This activity made sure that every PY was familiar with the source material before the visits to Ghibli Park in Aichi on the following day.

The discussion on local community problems encouraged PYs to consider how entertainment can drive social change at a smaller scale. Participants shared real

concerns from their home countries. For example, the PY from Greece discussed bullying in schools, while the PY from Palau raised concerns about youth drug usage. In response, the group proposed creative entertainment-based solutions such as podcasts serving as safe spaces for young people and modern shows designed to engage younger audiences.

Music therapy was a new concept for many participants, so it required some time for the discussion to develop fully. However, the introduction of the topic encouraged PYs to think about well-being from a sound-based perspective. Participants proposed several creative applications, including redesigned school bell sounds, vibration-based systems for the D/deaf community, and music therapy streaming services.

The final short film screening became an electrifying moment for the group. Each team had the opportunity to share a speech after presenting their film. For several PYs, this was their first experience participating in a film production, which made the moment particularly meaningful. The speeches turned into empowering reflections on their creative journeys. Rather than focusing on creating a perfect masterpiece, the experience emphasized enjoying the creative process and practicing time management.

PYs also reflected on the unique environment of the SWY. Many observed that living and collaborating together at sea fosters openness, empathy, creativity, and strong collaboration in ways that are difficult to replicate elsewhere. This environment helped strengthen both personal connections and creative teamwork among participants.

As a first-time facilitator, I feel deeply grateful for the opportunity to work with such a thoughtful and enthusiastic group. Their willingness to engage with complex ideas, collaborate creatively, and support one another made this experience truly rewarding.

CD-3 Risk Management for Natural Disasters

Facilitator: Maximiliano Montoya Gonzalez

Number of PYs: 21

(1) Discussion Goals and Objectives

- Develop a comprehensive understanding of disaster risk as the interaction between hazards, exposure, and vulnerability, and how these factors vary across contexts.
- Strengthen PYs’ knowledge of the disaster management cycle, including preparedness, response, recovery, and mitigation, and how these phases interconnect.
- Enhance analytical and decision-making skills through applied exercises and simulations that reflect real-world disaster scenarios.
- Foster cross-cultural exchange to identify diverse approaches, best practices, and shared challenges in disaster risk management.

(2) Program Onboard

Course Discussion Session [1] Stepping Into Crisis (Awakening)	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Understand the key components of disaster risk, including hazards, exposure, and vulnerability. ● Create an engaging, emotional, and educational experience that helps PYs understand the challenges faced by climate refugees as they seek safety and new opportunities. ● Recognize how social, environmental, and economic factors influence disaster impacts. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Facilitated discussion to define key disaster risk concepts using examples from PYs’ home countries. ● Simulation activity to help participants understand the challenges faced by climate refugees from various countries as they flee due to environmental disasters and climate change impacts. ● Group activity mapping hazards and vulnerabilities to visualize how risk emerges in different contexts.

Course Discussion Session [2] Seeing Invisible Threats	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Understand the importance of preparedness measures in reducing disaster impacts. ● To emotionally activate participants and establish that disasters are: 1.) Human stories 2.) Shaped by power, information, and timing. 3.) Experienced unevenly. ● Identify practical strategies used at individual, community, and national levels. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Comparative discussion on preparedness systems and early warning mechanisms. ● Disaster Headlines activity where participants set the emotional baseline for the course. ● Small group exercise identifying key preparedness measures and risk reduction strategies applicable to their communities.

Course Discussion Session [3] Human Dimension	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Understand the key elements of effective disaster response, including coordination and resource management. ● Train participants to support without fixing, protect dignity, and recognize their own impulses to control. ● Recognize the importance of communication and decision-making during emergencies. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Scenario-based group exercise simulating an emergency response situation. ● Psychological First Aid role play activity where participants practice: 1.) Presence over advice. 2.) Regulation before intervention. 3.) Human connection under stress. Making this not a therapy approach but the first contact support. ● Role-based discussion to explore different stakeholder perspectives during disaster response.

Course Discussion Session [4] System Failure	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Understand recovery as a long-term process that includes rebuilding, rehabilitation, and risk reduction. ● Experience cascading failures and leadership under stress. ● Expose the core failures of disaster risk management where cities are designed for convenience, politics, and growth. ● Recognize mitigation as a critical step in reducing future disaster risk. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Case study analysis of disaster recovery efforts in different countries. ● Activity and group discussion on case study “Triumph Crisis” for crisis management, role-based decision-making, system thinking. ● Disaster Mapping activity to transition the group from emotion to spatial/systemic thinking. ● Group discussion identifying mitigation strategies to reduce long-term vulnerability.

Course Discussion Session [5] Design	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Apply knowledge of the disaster cycle in a simulated, realistic disaster scenario. ● Understand the difference between: 1.) Visible vs. Invisible Hazard. 2.) Fast-onset vs. slow-onset risks. 3.) Reacting vs. anticipating. ● Develop practical skills in decision-making, prioritization, and collaborative problem-solving. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Multi-round disaster simulation where groups make decisions on preparedness, response, and recovery using limited resources. ● Hazards activity that primes systems thinking by revealing how the body struggles to detect slow-building threats. ● Group reflection to evaluate the effectiveness of their strategies and decisions.

Course Discussion Session [6] Integration	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Identify practical actions that can be implemented in their communities to reduce disaster risk. ● Practice real-world preparedness design. ● Develop actionable plans based on course learning. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Group activity to design community-based disaster risk reduction initiatives. ● Community preparedness canvas workshop where participants practice real-world preparedness design under constraint, learning that: 1) Preparedness is social, not just technical. 2) Funding masks fragility. 3) Community resilience depends on relationships, not institutions alone. ● Peer feedback and facilitated discussion to refine ideas and ensure feasibility.

Course Discussion Session [7] The Resilient City 45-Min Pressure Test. (Future & Legacy)	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Synthesize and apply knowledge from the entire course to address a comprehensive disaster risk management challenge. ● Reflect on key learnings and identify how they will apply them in the future contexts. ● Articulate a personal commitment to resilience. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Final integrated challenge requiring groups to analyze a disaster scenario and develop a complete disaster risk management strategy, covering preparedness, response, recovery, and mitigation. ● Structured reflection and group discussion to review key lessons and consolidate learning outcomes.

(3) Summary Forum (Presentation of the Discussion Results)

PYs presented a comprehensive overview of disaster risk management strategies, highlighting key concepts such as risk assessment, preparedness, response coordination, recovery planning, and mitigation. The presentation incorporated examples from the course simulation and action planning activities, demonstrating how theoretical concepts can be applied to real-world scenarios. The group emphasized the importance of proactive risk reduction and community-level engagement.

(4) Facilitator's Comments

The course was highly successful in achieving its learning objectives. PYs demonstrated consistent engagement, strong collaboration, and significant improvement in their understanding of disaster risk management concepts. The progressive structure of the course, moving from foundational concepts to applied simulations and action planning, allowed PYs to build both theoretical knowledge and practical skills. Cross-cultural exchange was particularly valuable, as PYs shared diverse experiences and perspectives.

Overall, the course effectively strengthened PYs' capacity to analyze disaster risk and identify strategies to enhance resilience in their communities. I'm deeply honored to have shared this risk management journey with a high-quality group of inspiring young leaders.

CD-4 Social Inclusion

Facilitator: Lillian Solheim

Number of PYs: 20

(1) Discussion Goals and Objectives

The course on social inclusion aims at equipping Participating Youth (PYs) with knowledge and practical skills to foster inclusive societies.

PYs will explore key concepts related to social inclusion and exclusion, share and discuss local initiatives, and examine challenges across different contexts.

Through port-of-call activities, visits, and discussions,

they will learn from concrete initiatives and examples, gain insight into diversity and commonalities, and reflect on measures and solutions to improve inclusion.

The course emphasises personal contributions to social change, motivating PYs to take action locally while building the motivation and competence needed to actively promote inclusion.

(2) Program Onboard

Course Discussion Session [1] Introduction to Social Inclusion	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> • Understand key themes of social inclusion • Explore social exclusion in Japan 	<ul style="list-style-type: none"> • Introduction to definitions and core concepts, like social inclusion and exclusion. • Participants brought images from their home countries representing social inclusion to them personally. Sharing images in groups. • Presentation on social exclusion issues in Japan, focusing on immigration and gender.

Course Discussion Session [2] Social Exclusion – World Tour	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Deepen understanding of social exclusion across a range of countries and contexts. ● Gain insight into diverse perspectives, challenges, and root causes of exclusion. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Country presentations from Chile, Dominican Republic, Greece, Palau and Spain. Presentations focused on key causes and impacts of social exclusion.

Course Discussion Session [3] Social Exclusion – Causes and Consequences	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Explore root causes and consequences of social exclusion. ● Learn tools to better understand exclusion-related issues and identify key stakeholders. ● Deepen understanding of the complexities of social inclusion and foster empathy, critical thinking, and solution-oriented perspectives. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Country presentation from Cameroon, Canada, Jamaica, Mongolia, Mozambique and New Zealand. ● Group discussion on similarities and differences in challenges to social inclusion using a problem-tree analysis and a stakeholder mapping. Discussions focused on racism and on lack of access to education and employment.

Course Discussion Session [4] Local organisations working for social inclusion	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Learn from real initiatives to promote inclusion ● Exchange ideas and challenges across contexts 	<ul style="list-style-type: none"> ● PYs create posters of an initiative, company or organisation working for social inclusion, which they shared in small groups. ● PY presentation on social exclusion in Okinawa

Course Discussion Session [5] Action for social inclusion	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Explore diversity and multiculturalism, and the link to social inclusion ● Brainstorm and plan an initiative related to social inclusion ● Learn basic project planning (including creating a problem statement, reflecting on the target group, expected results, risks, and where to get funding from, in addition to developing the practicalities around the event itself). 	<ul style="list-style-type: none"> ● In groups, PYs select a social issue and design a realistic initiative or campaign to promote social inclusion in Toyota City, while also making the event itself as inclusive as possible. PYs used the latest Promotion Plan for Internationalization of Toyota City as a reference. ● Groups present their projects (funfair, cross-cultural parade and community matsuri). ● PY presentation on social exclusion in Aichi.

Course Discussion Session [6] Youth Taking Action!	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Learn more about youth, youth participation and the role of young people in promoting social inclusion. ● Share and discuss youth participation related issues across the different countries 	<ul style="list-style-type: none"> ● Statement activity (yes/no) related to youth participation ● Theoretical input on youth (definitions, key facts, model for youth participation) ● Brainstorming on the different ways that young people can participate in society ● “Social Inclusion Champion”: Identification of personal skills and qualities needed for social change. ● Group discussion and creation of “Youth for social inclusion manifesto”

Course Discussion Session [7] Closing, reflection and evaluation	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Personal reflection, evaluate learning outcomes and gather feedback. ● Celebrate shared experiences and results. ● Articulation of future intentions for promoting social inclusion. ● Reflect on continued engagement and commitment beyond the program. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Reflection on learning outcomes and provide feedback on the course discussion (individually and in groups). ● Commitment Wall: Participants wrote pledges for individual actions to foster inclusion in their communities. ● Celebration: Sharing final thoughts of gratitude to the group

(3) Summary Forum (Presentation of the Discussion Results)

The participants connected the key learnings, tools, and methods from the Course Discussion sessions—including research on local initiatives, the problem-tree, the Youth Inclusion Hero, and the Youth Inclusion Manifesto—to the activities carried out during the port-of-call programs in both Okinawa and Aichi. By linking these elements, they gained a deeper understanding that social inclusion is not just a theoretical concept, but a lived practice expressed through culture, community engagement, and collective social action.

The presentation concluded with personal reflections on what social inclusion means to them. They also shared concrete actions they hope to pursue after the program, demonstrating a strong commitment to applying their learning in meaningful ways.

(4) Facilitator’s Comments

The course on social inclusion provided a meaningful and engaging exploration of how inclusion and exclusion function within societies. Through non-formal learning methods and interactive, varied exercises, participants gained a deeper understanding of the many factors that shape unequal access and participation.

Participants especially appreciated the country

presentations, which offered diverse and insightful perspectives on how history, geography, resources, and societal attitudes influence exclusion in different contexts.

After completing all presentations, PYs analysed broader issues such as access to education, poverty, and racism. They identified shared root causes, including historical inequalities, gender norms, unequal education systems, war and conflict, and limited resources. These often produce similar consequences like low economic growth, marginalisation, restricted mobility, and psychosocial stress. The discussions underscored the powerful role of systems and structures, and how challenging they can be to change.

While designing events to promote inclusion, participants explored practical ways to make activities accessible and welcoming. This included ensuring physical and linguistic accessibility, reducing financial barriers, creating safe and respectful environments, and actively involving local communities and youth. Cultural activities such as festivals were identified as meaningful tools for building trust and intercultural understanding.

The Port of Call Activity in Aichi provided direct encounters with individuals, organisations, and local authorities working on social inclusion. Hearing real stories and seeing concrete initiatives gave participants both realism and inspiration. The presentation at the Co-

Creation Conference highlighted a central insight: inclusion requires ongoing, conscious effort, but even small actions can contribute to positive change.

The course also deepened participants’ understanding of youth participation and the many ways young people engage in society, through civic involvement, volunteering, dialogue, creative expression, digital media, entrepreneurship, and social initiatives. They reflected on the skills and attitudes that make a “social inclusion champion,” including empathy, cooperation, creativity, compassion, and resilience, while acknowledging challenges such as limited opportunities, traditional systems, and high expectations. These reflections were used when creating their “Youth for Social Inclusion Manifesto,” which emphasised self awareness, using one’s voice, valuing diverse perspectives, staying open minded, learning from failure, supporting others, and leading with integrity.

The final session concluded with participants

expressing a strong motivation to help build more inclusive communities when they return home. Many shared intentions such as volunteering with non-governmental organisations, speaking up against exclusion, and taking action to create positive change in their local contexts. Other concrete ideas included seeking further training, continuing to learn, and using their lived experiences as a foundation for championing social change.

Evaluation results showed that expectations were largely met. Participants reported gaining substantial insights, practical skills, and motivation to apply their learning. They strengthened communication, presentation, and collaboration skills, and developed greater cultural awareness, empathy, confidence, and critical thinking. Many described feeling empowered to take action, noting that social inclusion is a deliberate, everyday practice—and that they each have a role in fostering more inclusive communities.

CD-5 Startups and Impact Investment

Facilitator: Tania Francis

Number of PYs: 21

(1) Discussion Goals and Objectives

- To help PYs understand how startups can address real social problems while building sustainable business models.
- To build a shared language around entrepreneurship, customer needs, funding, ecosystems, and social impact.
- To prepare PYs to engage meaningfully in the Aichi PBL and connect field observations to course concepts.
- To support PYs in working collaboratively toward the Co-Creation Conference and Summary Forum presentations that reflect both business understanding and social impact.

(2) Program Onboard

Course Discussion Session [1] Defining the Problem: Building Social Impact Startups	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Build a shared foundation for the course by defining startups and impact investment in accessible terms. ● Help PYs identify meaningful social problems and begin framing them with greater clarity. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Introduce key concepts and course expectations. ● Use pre-assignment sharing and group discussion to surface social issues from different countries and begin problem framing.

Course Discussion Session [2] Knowing your Customer and Designing with Empathy	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Deepen PY understanding of the people affected by the problems they wanted to address. ● Strengthen empathy and customer-centered thinking as part of innovation and leadership. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Use peer exchange to help PYs think more concretely about customer needs; urgent vs. good-to-have solutions. ● Encourage small-group discussion to move from broad ideas to more human-centered problem understanding.

Course Discussion Session [3] Funding the Mission & Storytelling for Impact	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Introduce the relationship between mission, storytelling, and funding. ● Help PYs understand that a strong pitch requires clarity of thought vs. showmanship. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Practice early pitch thinking in groups, though many PYs needed more time to refine their problem statements before pitching. ● Completed activity in the next session

Course Discussion Session [4] Learning to Pivot- Turning Failure into Progress	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Reinforce the importance of iteration, clearer problem definition, and adaptability. ● Continue building PY confidence in shaping and communicating startup ideas. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Adapt the session to provide additional time for refining problem statements and improving pitches. ● Focus discussion on identifying more specific, urgent, and credible problems worth solving.

Course Discussion Session [5] Growing Together- The Startup Ecosystem	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Help PYs understand that startups do not grow in isolation and depend on wider ecosystems. ● Introduce the role of founders, mentors, investors, incubators, corporates, and policy actors in enabling innovation. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Explore startup ecosystems through discussion and stakeholder mapping. ● Prepare PYs to better observe, interpret, and learn from the Aichi port of call experience.

Course Discussion Session [6] Field Reflections	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Help PYs reflect on what they observed in Aichi and connect those observations to course frameworks. ● Support them in identifying practical lessons about ecosystems, founders, and social impact in Japan. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Reflect on the Aichi fieldwork, including startup support organizations, founders, and community-based innovation. ● Use group discussion to identify key takeaways related to collaboration, ecosystem strength, and startup diversity.

Course Discussion Session [7] Blueprint for Impact and Value Mapping	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Synthesize learning across the full course and identify principles PYs wanted to carry forward. ● Prepare the group to communicate their understanding in a clear and collaborative way. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Help PYs co-create a forward-looking set of principles on innovation, impact, collaboration, and youth leadership.

(3) Summary Forum (Presentation of the Discussion Results)

CD-5 presented its key learnings from the course and the Aichi PBL through a structured summary covering definitions, startup lifecycle, failing fast, funding and investor roles, ecosystem learning in Aichi, and principles

for moving forward.

The group demonstrated that they had understood the major takeaways from Aichi, especially the importance of collaboration, ecosystem support, social impact, and the role of young people in driving change.

(4) Facilitator's Comments

CD-5 was a rewarding group to facilitate. Over time, PYs became more open, more participatory, and more thoughtful in how they engaged with the subject and with one another.

What helped most was adapting the facilitation style to their needs: providing short framing inputs where useful, then creating varied opportunities for small-group discussion, peer learning, and sharing.

Their strongest engagement came through discussion, peer exchange, and especially through the Aichi PBL, which made earlier concepts come alive in a much more practical way.

Several participants appeared genuinely inspired by the possibility that startups can create meaningful change in their own countries and communities.

I remain hopeful that one or more concrete startup ideas may continue to flourish beyond this program. Overall,

I was deeply impressed by the group's growth, their openness to the topic, and the quality of understanding they developed by the end of the course.

Concepts that initially felt abstract, particularly pitching, startup funding, and iteration, became much more tangible after PYs experienced Aichi firsthand through the Glocal Innovators Summit, founder interactions, Nagono Campus, LivE Quality, Hiranoya Ryokan, and startup support organizations.

I would also like to express my sincere gratitude to the Cabinet Office, the Aichi local committee, and our ADM team for the care, thoughtfulness, and professionalism with which this program was delivered. Their support, responsiveness, and attention to detail created the conditions for meaningful learning, strong collaboration, and a deeply memorable experience for both PYs and facilitators. It was a privilege to be part of a program carried out with such warmth, seriousness, and commitment.

CD-6 Education in Local Community

Facilitator: Seon Mi Jang

Number of PYs: 21

(1) Discussion Goals and Objectives

The goal of this course was to provide PYs with a holistic foundation in community education pedagogy, strategy and design, so that they will be better equipped to be of positive contribution to their local communities

and especially youth and marginalized segments of society. We will define and stretch the notion of “community education”, and cover topics such as purpose, belonging, and community-centered learning.

(2) Program Onboard

Course Discussion Session [1] Introduction to community education, community agreements and key frameworks	
Goals and Objectives	Activity Contents
Introductions of the course and PYs. Review the course outline, the pre-assignment, and key frameworks. Establish community agreements. Define “community education”	<ul style="list-style-type: none">● Name Game● Review of Pre-assignments and frameworks● Creation of community agreements● Establish buddy system● Collective definitions of words: “community” and “education” and sharing examples from home countries● Written feedback and suggestions

Course Discussion Session [2] Unpacking systemic power dynamics necessary for “community education” through the lens of belonging, equity, and inclusion	
Goals and Objectives	Activity Contents
Introduce the notions of belonging, equity and inclusion - unpack dynamics of power, identity, diversity, intersectionality and marginalization. Anchor importance of centering the community.	<ul style="list-style-type: none"> ● Buddy check in (how was your last 24 hours) ● Reinforcement of community agreements ● Superhero-superpower warm-up game ● Definitions of: “power” “privilege” “marginalized” “oppressed” ● Unpacking the wheel of power/privilege ● Written feedback and suggestions

Course Discussion Session [3] Understanding states of the nervous system and somatic release practices, for self-regulation and being a healthy leader in the classroom	
Goals and Objectives	Activity Contents
Introduce polyvagal theory, the nervous system and its relationship to mental, emotional and physical health for community educators. Explore tools for self-regulation and co-regulation. Reconnecting with the natural world.	<ul style="list-style-type: none"> ● Buddy check in (how was your last 24 hours) ● Reinforcement of community agreements ● Polyvagal theory diagram ● Somatic release exercises ● Exploration of fractals found in nature ● Trauma-informed pedagogy for the classroom ● Written feedback and suggestions

Course Discussion Session [4] Community education program design and learning styles	
Goals and Objectives	Activity Contents
Explore how to teach according to different learning styles, introduce the concept of multi-modal learning, multiple-intelligences creating accessible approaches, and teaching based on developmental stages of learners. Build lesson plans based on the needs of different kinds of learners and age groups.	<ul style="list-style-type: none"> ● Buddy check in (how was your last 24 hours) ● Reinforcement of community agreements ● Presentation on learning styles, multi-modal learning, multiple intelligences, developmental/age-based learning ● Participants work in issue-based subgroups based on their interests identified in pre-assignment to develop a mock community education curriculum and lesson plan ● Written feedback and suggestions

Course Discussion Session [5] Community education program design and teaching techniques	
Goals and Objectives	Activity Contents
Introduce engaging and alternative teaching methods that make learning more interesting. Review and modify direction based on mid-term evaluations and feedback to best suit the needs of PYs. Begin preparing for Co-Creation Conference presentations.	<ul style="list-style-type: none"> ● Check-in with a new buddy ● Reinforcement of community agreements ● Somatic grounding ● Warm-up activity: expressing feelings as colors and texture ● Classroom Technique: Parking Lot ● Teaching method: Scavenger Hunt for puzzle pieces ● Teaching method: Where do you stand? ● Teaching method: Collective brainstorming via “Graffiti” (problem, context, possible solutions/resources) ● Teaching method: Roleplay and forum theatre ● Written feedback and suggestions

Course Discussion Session [6] Meta-review of techniques and approaches learned through the course	
Goals and Objectives	Activity Contents
Review all teaching methods and educational pedagogy that have been introduced and explored in the Course Discussion sessions thus far. Begin preparing for Summary Forum presentations	<ul style="list-style-type: none"> ● Reinforcement of community agreements ● Review of all facilitation techniques and frameworks that have been explored up to this point organized into the following categories: <ul style="list-style-type: none"> ● Building support systems ● Community agency and voice ● Group facilitation and management ● Pedagogy, philosophy, teaching/learning strategies ● Social inclusion & equity ● Well-being ● Curriculum-based content engagement activities ● Delegate roles and content groups for the Summary Forum to all PYs ● Written feedback and suggestions

Course Discussion Session [7] Closing review, reflections and evaluations	
Goals and Objectives	Activity Contents
Review all frameworks and classwork created from previous sessions. PYs to practice embodied modelling of learned skills. Final evaluation. Summary Forum preparations.	<ul style="list-style-type: none"> ● Reinforcement of community agreements ● Gallery walk of all the manila paper, and printouts used in sessions in chronological order. ● Review of core themes and learnings ● Summary Forum rehearsals ● Practice leading various facilitation techniques we learned ● Complete final written evaluation

(3) Summary Forum (Presentation of the Discussion Results)

The Summary Forum was very successful for CD-6 PYs. There was minimal stress leading up to the presentation and every PY in my course was able to contribute to the presentation as part of small groups. The PYs intentionally created a presentation that not only explained what we learned, but also facilitated interactive exercises to help the audience engage with various forms of experiential education. CD-6 PYs successfully delivered a dynamic and informative presentation. I am very proud of CD-6 PYs and their Summary Forum presentation.

(4) Facilitator's Comments

The Course Discussion sessions have been incredibly fruitful, and I am very proud of the PYs in my CD. They have displayed a great amount of dedication to and interest in the course materials as well as demonstrated a great level of care for one another in the sessions and during POCs. This has been a wonderful experience of co-learning and co-creation - I feel that I have learned a

lot from my PYs just as they have learned from me. For example, when the topic of multiple intelligences came up in session 4, the PYs showed great interest in learning more about Emotional Intelligence. This led me to add a bonus session around the topics of “Emotional Intelligence, Mental Health and Relationships” during a half-holiday, that was also open to everyone including PYs in other CDs, Facilitators and ADMs to attend. The topic of emotional intelligence, self-awareness and self-development was an interesting theme that found its way into many of our conversations, including in Aichi during our final site visit, where we were provided a presentation about how many of Japanese students are very high achieving in school based on global standards, but show very low confidence in identifying as adults by the time they reach the age of 18. In this discussion we were able to connect these trends to the fact that many Japanese students are not often asked for their opinion, their personal preferences, feelings or emotions - which means that the muscle for critical thinking, decision making, self-awareness, agency, and self-sufficiency are under-developed in comparison

to international youth who are given more opportunities and societal expectations for holding responsibilities, and advocating for personal preferences and opinions in their learning journeys - in school and in everyday life. In my conversations with many JPYs it was clear that they were hungry for more education around emotional intelligence, and opportunities to understand and express their emotions - they identified to me that not having these opportunities can lead to a lot of mental health issues among Japanese youth, including youth suicides. I believe that there is something here that could be valuable to be explored deeper in future SWY and other Japanese youth programs.

I observed incredible growth in my PYs and they also demonstrated very strong leadership capability and skills through their engagement with the materials. In CD-6 FPY and JPY integrated in meaningful ways and formed strong bonds across international and cultural differences. I will miss my PYs greatly.

The ADM team did an incredible job with everything, and I am especially grateful for their hard work and dedication to supporting the facilitators. SWY37 was a memorable and beautiful program. Thank you so much for everything!

CD-7 Community Design

Facilitator: Ari Yuda Laksana
 Number of PYs: 19

(1) Discussion Goals and Objectives

Goals

PYs will learn how Asset-Based Community Development (ABCD) strengthens communities by building on existing assets. Through global discussions and engagement in Aichi, PYs will co-design solutions that foster resilience, inclusion, and social cohesion. They will also reflect on how youth can help communities thrive amid demographic, economic, and environmental challenges by generating sustainable and future-ready innovations.

Objectives

By the end of the Course Discussion Program, PYs will

be able to:

- Understand and apply the principles of Asset-Based Community Development (ABCD) to community challenges.
- Analyse demographic, economic, and environmental issues through an asset-based perspective.
- Engage community stakeholders with empathy, inclusivity, and respect.
- Co-design practical and sustainable initiatives that strengthen resilience and social cohesion.
- Reflect on the role of global youth in building stronger communities and apply these insights in their home countries.

(2) Program Onboard

Course Discussion Session [1] Co-Creation on Sustainable Community Definition	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> • Set the tone for the course discussion • Build a shared understanding of a sustainable community • Identify key community challenges across countries 	<ul style="list-style-type: none"> • Postcard sharing in small groups • Group discussion to define a sustainable community • Sharing community challenges in breakout and plenary sessions

Course Discussion Session [2] The Asset-Based Community Development (ABCD) Approach	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> • Introduce the ABCD approach and its principles • Identify community assets (people, associations, institutions, places, connections) • Recognize shared and global assets 	<ul style="list-style-type: none"> • Sharing local community assets using photos • Creating asset murals • Gallery Walk to explore ideas, ask questions, and deepen understanding

Course Discussion Session [3] Building Relationship for Strong Association	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Understand the roles of associations and institutions in communities ● Strengthen communication and relationship-building skills 	<ul style="list-style-type: none"> ● “Bird in Hand” activity to identify personal and community assets ● Social style communication exercise ● Empathy reflection through the rope exercise

Course Discussion Session [4] The ABCD Project on Board	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Introduce the 7 steps of ABCD practices ● Practice storytelling and community project ideation ● Prepare for community learning during the Okinawa visit 	<ul style="list-style-type: none"> ● Introduction to the 7 steps of ABCD. ● Small-group storytelling and TED-style sharing ● Video project brainstorming on sustainable communities ● Photo challenge preparation for Okinawa

Course Discussion Session [5] The X-Factors of ABCD	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Reflect on community learning from the Okinawa visit ● Apply ABCD concepts through project activities ● Analyse external forces affecting community sustainability 	<ul style="list-style-type: none"> ● Reflection on Okinawa institutional visits ● Video project reflection and discussion ● Place-based community improvement brainstorming ● PESTLE analysis of external forces ● Preparation discussion for PBL in Aichi

Course Discussion Session [6] Leveraging ABCD Outcomes through Partnership	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Reflect on learning from the Aichi PBL experience ● Identify potential institutional partners ● Prioritize stakeholder collaboration for community initiatives 	<ul style="list-style-type: none"> ● Reflection on PBL and cross-course presentations ● 3-minute ABCD explanation challenge ● Stakeholder mapping and partnership discussion ● Prioritization using the Impact–Effort–Readiness matrix

Course Discussion Session [7] Taking Action Beyond Current Desire	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Reflect on overall learning from the course discussion ● Develop collaborative actions for community initiatives ● Prepare insights for the Summary Forum 	<ul style="list-style-type: none"> ● Reflection on the discussion journey ● Individual action planning for home communities ● Simulation of a “Global ABCD Summit” for collaboration ● Final reflection on group learning and PBL outcomes

(3) Summary Forum (Presentation of the Discussion Results)

PYs began the presentation by introducing the overall structure of their presentation, which consisted of the introduction, reflection of sessions, a video segment, and a conclusion. They summarized the key learning points from the Course Discussion, particularly the concept of

Asset-Based Community Development (ABCD), which emphasizes recognizing and mobilizing community assets such as people, associations, institutions, places, and connections. PYs also reflected on the importance of effective communication through the Social Styles framework and highlighted how understanding different communication styles can strengthen collaboration within

communities. In addition, they shared insights from the 7 Steps of ABCD practice and discussed how broader external forces influencing communities can be analysed using the PESTLE framework. These reflections helped PYs understand both the challenges and opportunities related to sustainable community development. The presentation concluded with a shared message that sustainable communities are built not only through institutions, but through the active participation and collaboration of individuals, associations, and communities working together toward common goals.

(4) Facilitator's Comments

Throughout the seven sessions of the Community Design discussion, participants showed strong collaboration and openness despite coming from different cultural backgrounds. The activities helped them build trust, share personal experiences, and explore ideas about sustainable communities together.

In the first session, the postcard activity allowed participants to share stories and discover similarities in their community challenges, such as centralism, overpopulated cities, limited free time, and feeling disconnected from neighbours. From this discussion, they collaboratively defined a sustainable community as “people working together to create a long-lasting protected environment that supports well-being and shares the values”.

Through activities such as the Mural Gallery Walk, communication style reflection, and empathy exercises, participants learned about the ABCD approach and identified the assets they have within themselves and their communities. As the sessions progressed, they became more confident in expressing their ideas in English and working together during the project-based learning and presentations.

In the final session, participants agreed on collaborative actions to continue learning and sharing the ABCD approach by updating their community initiatives through social media and a mailing chain at least once a year. Through the simulation of the “Global ABCD Summit”, they also discussed how their actions as the CD-7 community can remain sustainable, inclusive, and meaningful.

Overall, the sessions achieved their objectives and participants appreciated the practical learning experience. To further enhance future discussions, it would be helpful to continue fostering an inclusive communication environment by encouraging participants to speak clearly, listen attentively, and create space for everyone to express their ideas with confidence.

I would like to express my sincere gratitude to the Cabinet Office, Government of Japan and the Center for International Youth Exchange for the opportunity to facilitate this discussion, and to my fellow facilitators for their support and collaboration.

CD-8 Inheritance of Traditional Culture

Facilitator: Priscilla Madrid Valero

Number of PYs: 21

(1) Discussion Goals and Objectives

The goal is for PYs to learn very practical tools to preserve and share traditional culture. While learning these tools, the PYs who take this course will also learn about tradition and culture of their fellow PYs all over the world because of the practical and active format of the Course Discussion. PYs will strengthen and develop skills such as multicultural communication and dialogue, culturally sensitive leadership and teamwork. PYs will

practice their public speaking and creative skills, as well. PYs will develop a critical thinking lens regarding culture and tradition and create strategies to preserve tradition and will return home with commitments to promote culture and tradition. This Course Discussion promotes mutual understanding and empathy and teaches how we can connect while embracing the value of diversity and getting comfortable with unfamiliar situations.

(2) Program Onboard

Course Discussion Session [1] My life in Traditions	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● Define CD expectations ● Build a safe space for everyone to share ● For PYs to 1) know each other and their cultures in a deeper level. 2) do some introspection and reflection on their own ideas around traditional culture. 3) get comfortable sharing opinions and talking. 	<ul style="list-style-type: none"> ● Ice breaker ● Creation of group agreements and expectations ● “My life in lines and traditions” exercise ● Facilitator will explain the goals and objectives for the CD. ● Presentation of pre-assignments by PYs ● What is Traditional Culture? Reflection about the role traditional culture plays in everyday life. ● Explain the final project on the inheritance of cultural traditions. ● Debrief and group exchange ● Session’s Feedback ● One-word exercise

Course Discussion Session [2] Analysing Culture	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● To develop and reinforce critical thinking skills ● To promote multi-cultural dialogue ● To reflect about different areas that intersect when thinking about traditions and cultures ● To develop practical skills to analyze culture and tradition 	<ul style="list-style-type: none"> ● Frameworks to analyze cultures ● Presentation, discussion, and reflection around critical thinking about traditional culture. Define as a group critical thinking. What shapes culture and tradition? ● Review of case studies ● Empathy: definition and development of a new word ● Debrief and reflection ● Session’s Feedback ● One-word exercise

Course Discussion Session [3] SDGs and Traditional Culture	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● To reflect on how traditional culture can be connected to the Sustainable Development Goals ● For PYs to reflect the role of culture in their lives and identity ● For PYs to analyze the importance of traditional culture in a globalized and modern world 	<ul style="list-style-type: none"> ● Energizer activity ● Mapping Cultural Practices and its relation to the Sustainable Development Goals. ● Are all cultural traditions worth preserving? ● Cultural appreciation, appropriation and exchange ● Reflective Discussion ● Debrief and feedback ● One-word exercise

Course Discussion Session [4] The Transformations of Culture	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● For PYs to practice teamwork, collaboration and negotiation ● For PYs to reinforce their leadership skills ● For PYs to find non-verbal and creative ways to communicate and share culture 	<ul style="list-style-type: none"> ● Energizer ● Open space for PYs presentations of their own culture ● Colonization and traditions ● Case studies and discussion about Okinawa and Traditional Culture ● Debrief and reflection ● Feedback ● One-word exercise for closure

Course Discussion Session [5] Strategies for Cultural Preservation	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● To promote a creative mindset for problem solving around the inheritance of traditional Culture ● For PYs to learn practical skills and tools for preserving, promoting and inheriting traditional culture ● For PYs to practice teamwork, collaboration and negotiation ● For PYs to reinforce their leadership skills 	<ul style="list-style-type: none"> ● Activity in teams to explore models for the preservation of traditional culture: <ul style="list-style-type: none"> *Community-Based Model *Digital Preservation Model *Partnership and Collaboration Model *Economic Empowerment Model ● Group presentation and discussion ● Debrief and reflection ● Feedback ● One-word exercise for closure

Course Discussion Session [6] Culture as a Shared Responsibility	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● To develop practical skills to promote traditional culture in innovative ways and reinforce problem solving skills ● To use modern tools for the preservation of cultural tradition ● For PYs to be able to reflect and share about what they have learned so far and how it can be applied 	<ul style="list-style-type: none"> ● Reflection of Port of Call in Aichi ● Cultural buddy's presentations ● Presentation of the initiatives of the preservation of traditional culture models ● Check in for final project and potential Post Program Activities based on the CD ● Debrief and reflection ● Feedback ● One-word exercise for closure

Course Discussion Session [7] Innovation and Creation in the Inheritance of Traditional Culture	
Goals and Objectives	Activity Contents
<ul style="list-style-type: none"> ● To take home a better understanding of traditions and cultures from countries and cities from all over the world ● To have a cultural final project that is a new creation ● To create a community of culture promoters that supports each other ● To connect everything PYs have learned in SWY, PBL, the Course Discussion and real life 	<ul style="list-style-type: none"> ● A game for reflection of the importance of dialogue and mutual understanding. ● Presentation of PYs' final project around traditional culture. ● Group and individual reflection of the CD. ● Reflection about the idea of traditional culture after all the lessons. ● Creation of commitments to promote traditions and culture in PYs' countries after SWY finishes. Ideas for PPAs. ● Final feedback ● One-word exercise for closure

(3) Summary Forum (Presentation of the Discussion Results)

The PYs collaborated in teams so that everyone could participate and add something of their own to the Summary Forum Presentation. They showcased a lot of creativity. The group was represented by people who were willing to step out of their comfort zone, and they were supported by the group.

(4) Facilitator's Comments

The group was willing to have difficult conversations and reflect on complex topics. This made them reflect and question what they thought they knew about their own culture and their fellow PYs. The PYs mentioned how they felt they now see things through a new lens that gives space to diversity and other perspectives besides their own.

1.2. 地域実践活動

愛知県における地域実践活動の目的

愛知県での地域実践活動は、「失われた30年」を経て転換期にある日本において、製造業の中心地でありながら都市と地方が共存する愛知県を「日本の課題のショーケース」として捉え、地域の未来を切り拓くためのアプローチを学ぶ活動である。PYが地域の現場に入り、社会課題

の解決に取り組むキーマンやローカル・ユースとの協働を通じて、国際的な視点と地域的な視点を融合させた実践的な解決策を模索することを目的とした。

愛知県は、少子高齢化、伝統文化の継承、防災、環境問題など、日本全体が直面する多層的な課題をフィールドに、以下の8コースのプログラムを設計した。

CD	テーマ	視察地域
CD-1	気候変動と再生可能エネルギー	豊橋市、名古屋市
CD-2	ウェルビーイングのためのエンターテインメント	名古屋市、長久手市、豊田市
CD-3	自然災害に対するリスク管理	名古屋市、常滑市、春日井市
CD-4	共生社会	日進市、豊田市
CD-5	スタートアップとインパクト投資	名古屋市、蒲郡市
CD-6	地域コミュニティの中での教育	刈谷市、名古屋市
CD-7	コミュニティデザイン	豊田市、名古屋市
CD-8	伝統文化の次世代承継	名古屋市、碧南市、常滑市

日程	時間	プログラム
2月28日 (土)	8:00 9:00-9:30 10:00-12:00 12:00-13:00 13:10-13:40 14:30-17:00 17:20-18:00	名古屋港入港 オープニングセッション HELLO SWY Program 昼食 下船 地域理解研修① (CDごとに愛知の文化・産業を体験) ・CD-1: 瀬戸蔵ミュージアム ・CD-2: 凧作り体験 ・CD-3: トヨタ産業技術記念館 ・CD-4: 名古屋城 ・CD-5: 剣道体験 ・CD-6: 半田赤レンガ建物見学・鍍着付け体験 ・CD-7: あいち航空ミュージアム ・CD-8: 徳川園・徳川美術館 帰船

日程	時間	プログラム
3月1日 (日)	9:00-9:30 9:30-10:50 11:45-12:45 13:00-16:30 17:30 19:00-20:30	下船 地域理解研修②(大須商店街) 昼食 グローバルイノベーターズサミット(GIサミット) (基調講演、イノベーターズピッチ、テーマ別分科会) 帰船 船上レセプションパーティー (大村愛知県知事、広沢名古屋市長出席) ・開会挨拶:愛知県地域実践活動実行委員長 ・来賓挨拶:大村愛知県知事 ・青年代表挨拶 ・ギフト贈呈 ・記念撮影 ・乾杯挨拶:広沢名古屋市長 ・閉会挨拶:愛知県青年国際交流機構会長
3月2日 (月)	8:10-9:10 午前-午後 17:00-18:00	下船 テーマ別フィールドワーク①(CDごとに関連施設訪問・活動) ・CD-1:みなとアクルス、名古屋大学 ・CD-2:大須・栄エリア、愛・地球博記念公園、ジブリパーク ・CD-3:中部国際空港 ・CD-4:名古屋外国語大学、保見団地 ・CD-5:なごのキャンパス、株式会社LivEQuality 大家さん ・CD-6:愛知教育大学、名城大学附属高校 ・CD-7:合同会社なんつな、とよたみんなの人事部 ・CD-8:株式会社スズサン、株式会社竹田嘉兵衛商店 帰船
3月3日 (火)	8:00-9:10 午前-午後 17:00-17:40	下船 テーマ別フィールドワーク②(CDごとに関連施設訪問・活動) ・CD-1:豊橋市バイオマス利活用センター、武蔵精密工業株式会社 ・CD-2:UNIBO、NPO法人コモンビート ・CD-3:名古屋大学減災館、株式会社テラ・ラボ ・CD-4:トヨタ会館、豊田市役所多様性社会共創課 ・CD-5:旅館平野屋 ・CD-6:一般社団法人Our、一般社団法人アスパシ ・CD-7:なごや寺町まちづくり協議会 ・CD-8:株式会社角谷文治郎商店、INAXライブミュージアム 帰船
3月4日 (水)	9:00-11:30 11:30-12:50 13:00-14:40 15:00-15:30 15:30-16:30 17:30	成果発表会準備 昼食 成果発表会(Co-Creation Conference) フェアウェルセレモニー オープンシップ 出港

(1) 1日目は、名古屋港への入港後、全PY共通のウェルカムプログラムから開始した。午前中は「HELLO SWY Program」として、愛知県内の一般住民約140名を船内に招待した。PYは自国のナショナル・プレゼンテーションのダイジェストを披露し、続いて実施されたシップツアーでは、地域住民との直接的な交流を通じて、お互いの文化を尊重し合う温かい雰囲気が醸成された。

午後は「地域理解研修①」として、各CDのテーマに沿った県内各地の歴史的・産業的スポットへ分かれた。例えば、CD-1は瀬戸蔵ミュージアムで、千年の歴史を持つ瀬戸焼が産業としていかに近代化したかを学び、CD-2は幸田町の広大な自然の中で地元の人々と共に和風を揚げ、日本の伝統的な遊びとコミュニティの繋がりを体感した。PYは、これから始まる愛知での活動に向け、地域の成り

立ちや文化的背景を深く認識する1日となった。

(2) 2日目の午前中は、愛知県が持つ多様性の象徴である大須商店街にてローカル・ユースとの混合グループによる街歩きを実施した。歴史ある寺社、昔ながらの演芸場、そして最先端のサブカルチャーや外国人が経営する飲食店が混在する大須の「ごった煮」文化を体感し、PYは日本の都市部における多文化共生のリアルな姿をスケッチや写真に収めた。午後は「グローバルイノベーションズサミット」を開催した。愛知の社会課題に挑む起業家たちの熱いピッチを聞き、続くテーマ別分科会では、PYと日本の若者が同じ視座に立って白熱した議論を交わした。夜には知事を迎えた船上レセプションが催され、地域全体がPYを歓迎していることを改めて伝え、行政・民間・ユースの三位一体となった交流の場となった。

(3) 3日目は、CDごとに愛知県内の各地へ深く入り込み、専門的なフィールドワークを行った。

CD-1

名古屋港の再開発エリアみなどアクルスにて、最先端のスマートタウンにおけるエネルギー管理システムと持続可能な都市設計を視察した。その後、名古屋大学で再生可能エネルギー専門家と議論を重ね、脱炭素社会の実現に向けた技術と政策の重要性を学んだ。

CD-2

午前は名古屋の都市中心部(大須・栄)を巡り、午後からは愛・地球博記念公園とジブリパークのつながりを体験した。物心両面での豊かさにつながるエンターテインメントに必要な要素は何かという問いを持ち、サブ・カルチャーを含むエンターテインメントが地域の活性化や個人・社会のWell-beingにどのように寄与しているのかについて考察を深めた。

CD-3

海に面した中部国際空港を訪問し、大規模自然災害を想定した事業継続計画や、避難誘導の具体的なプロセスを視察した。PYは、高度にシステム化された日本の防災体制に強い関心を示し、自国への応用可能性を質問した。

CD-4

名古屋外国語大学にて、日本で育つミックスルーツの学生たちとの対話を通じ、目に見えない障壁について学んだ。午後は豊田市の保見団地を訪れ、ブラジル系住民が多く住む地域の多文化共生の現場を視察し、支援のあり方を議論した。

CD-5

廃校を活用したインキュベーション施設などのキャンパスを訪問した。LivEQualityでは、生活困窮者への住まい提供という社会課題をビジネスの力で解決する手法を学び、社会的企業の本質について理解を深めた。

CD-6

愛知教育大学及び名城大学附属高校にて、実際の授業や部活動を視察した。日本の学校が果たすコミュニティの核としての役割や、若者が自ら問いを立てて解決する探究学習の実践事例を体験し、教育の未来を議論した。

CD-7

豊田市の合同会社なんつな及びとよみんなの人事部を訪問した。地域の人材不足という課題を逆手に取り、若者や兼業人材が地域に貢献できる仕組みづくりを学び、地方創生における人の繋がり的重要性を実感した。

CD-8

株式会社スズサンと株式会社竹田嘉兵衛商店を訪問し、有松絞りの伝統技法がいかに継承されてきたか、また、現代のデザインや国際市場に適合し、どのように進化しているかを視察した。PYは、日本のものづくり精神や職人の技術力の高さに関して理解を深めた。

(4) 4日目は、前日の学びを踏まえ、各コースのテーマに関連する実践現場を訪問し、現場での取り組みに触れながら理解を深めた。

CD-1

豊橋市のバイオマス利活用センターで、生ごみや下水汚泥等を活用したバイオマスエネルギーを生み出す官民連携の仕組みを視察した。続く武蔵精密工業では、マイクログリッドを活用した蓄電と放電システムや、太陽光エネルギーを活用した災害時のエネルギー供給システムなどの地域エネルギーの在り方、また、企業のカーボンニュートラルへの転換プロセスを学び、地域全体での循環型社会の構築を考察した。

CD-2

eスポーツ施設UNIBOにて、eスポーツを通じて年齢や障がいを超えたフラットなつながりを生み出す仕組みを学び、様々な背景を持つスタッフと交流した。また、NPO法人コモンビートのワークショップを通じ、表現活動がいかに個人の多様性を認め合う場を作るかを学び、エンターテインメントの社会的価値を再定義した。

CD-3

名古屋大学減災館にて、地震の揺れや建物の倒壊の様

子についてシミュレーションを通して体験した。午後は株式会社テラ・ラボで航空機やドローン、DXを活用した災害情報共有システムを学び、最新技術と自助・共助・公助の組み合わせの重要性を体感した。

CD-4

トヨタ会館にて、移動の自由をすべての人に提供するモビリティの未来を視察した。午後は豊田市役所を訪問し、行政がいかにも様な住民ニーズを吸い上げ、多文化共生政策に落とし込んでいるかを担当者との直接対話を通じて学んだ。

CD-5

蒲郡市の旅館平野屋を拠点に、地元の起業家や投資家との円卓会議を実施した。地方における投資の役割や、地域資本を活用したイノベーションについて、PYは自国の経済状況と照らし合わせながら熱心な意見交換を行った。

CD-6

一般社団法人Ourや一般社団法人アスバシを訪問した。学校の枠を超えたキャリア教育や、若者の「マイプロジェクト」を支援するコーディネーターの役割を学び、社会全体で若者を育てるシステムの構築について理解を深めた。

CD-7

名古屋の寺町エリアを散策しながら、街を立体的に理

解した。なごや寺町まちづくり協議会や、地域の挑戦者との対話を通して、個人の想いで街を変えられることを学んだ。最後は地域の方も巻き込みながら、「どのようにしたらこの地域がもっと面白くなるか」について全員でディスカッションを行った。

CD-8

午前は碧南市の角谷文治郎商店にて本みりんの伝統醸造を学んだ。午後は常滑市のINAXライブミュージアムを訪問し、陶器を通じたモノづくりの歴史や現代までの変遷に触れた。PYは、五感を通じて日本のモノづくり精神と、それが支える地域文化の奥深さを体験した。

(5)最終日の5日目に、PYは地域実践活動の集大成として「Co-Creation Conference」に臨んだ。CDごとに、4日間で出会った地域の方々の思いや直面している課題を整理し、自分たちが持つグローバルな視点を掛け合わせた発表が行われた。当日は訪問先の関係者も駆けつけ、PYの提案に真剣に耳を傾け、フィードバックを行った。成果発表後、涙ながらのフェアウェルセレモニーを経て、地域住民へ船内公開が行われた。最後に、多くの市民やローカル・ユース、ボランティアが岸壁に詰めかける中、にっぽん丸はPYと共に名古屋港を出航した。製造業の力強さや人々の温かさが共存する愛知での5日間は、単なる視察を超え、自国の、そして世界の未来を自分たちの手で創っていくという強い使命感を持つきっかけとなった。

1.3. サマリー・フォーラム

サマリーフォーラムはコース・ディスカッションのまとめとして3月11日に開催された。それぞれのコース・ディスカッション・グループは工夫を凝らした発表を行い、コースを通しての学びを披露した。

参加青年は愛知実践活動のCo-Creation Conferenceにて自分の所属するコース以外のコースの内容を一定程度把握しているが、サマリーフォーラムではディスカッショ

ンプログラム全体を通じた成果を互いに認識する機会となった。参加青年はフォーラムのためにコースのメンバーと準備や練習を重ねたことで、自身のコースの振り返りにもつながった。

サマリーフォーラム当日はそれぞれがコース・ディスカッションのメンバーと過ごす最後の時間を楽しみ、すべての参加青年にとって心に残る経験となった。

2 地域訪問活動

2月23日から2月25日の3日間にわたり、沖縄県での地域訪問活動を実施した。1日目は、PY全員で首里城を見学した。2日目の午前はLGごとに沖縄県の自然や文化・地域を体験し、午後は平和を考えるワークショップ

を実施した。最終日の3日目は、沖縄科学技術大学院大学(OIST)を訪問し、OISTの学生等とともに異文化理解や多様性の尊重に関する議論が行われた。

日程	時間	プログラム
2月23日 (月・祝)	8:00 11:00-12:00 12:00-13:00 13:00 14:00-16:00 16:30 18:00-18:30 18:30-20:00	那覇港入港 オリエンテーション 昼食 下船 地元高校生による世界遺産「首里城」ツアー 帰船 沖縄県知事表敬訪問 ・ 歓迎挨拶：玉城沖縄県知事 ・ 青年代表挨拶 ・ ギフト贈呈 ・ 写真撮影 ・ 懇談 船内歓迎レセプション (玉城沖縄県知事、金城那覇副市長、加藤 OIST 事務局長出席) ・ 開会挨拶：沖縄県実行委員長 ・ 歓迎挨拶：玉城沖縄県知事 ・ 来賓挨拶：加藤 OIST 事務局長 ・ 青年代表挨拶 ・ ギフト贈呈 ・ 乾杯挨拶：金城那覇副市長 ・ 歓談、沖縄文化パフォーマンス ・ 写真撮影 ・ 閉会：沖縄県青年国際交流機構会長
2月24日 (火)	7:55-8:10 9:00-12:00 12:00-13:00 14:00-17:00 18:00	下船 LGごとに体験交流プログラム ・ 1号車(K/N)：さんご畑(沖縄の海とさんご) ・ 2号車(A/B)：宜野湾区公民館(沖縄の民具づくり) ・ 3号車(C/M)：長田区公民館(エイサー体験) ・ 4号車(D/L)：糸満海人工房資料館(サバニの大漁旗づくり) ・ 5号車(E/H)：繁多川公民館(島豆腐づくりと地域交流) ・ 6号車(F/I)：漫湖水鳥・湿地センター(マングローブ体験) ・ 7号車(G/J)：沖縄尚学高等学校(国際バカロレア、茶道体験) 昼食 地元高校生と平和を考えるワークショップ 帰船
2月25日 (水)	8:00-8:30 9:30-12:00 13:00-15:00 15:30 15:45-17:00 17:30	下船 沖縄科学技術大学院大学(OIST) 国際通り 帰船 フェアウェルセレモニー 出港

(1) 那覇入港後、にっぽん丸に実行委員メンバーが乗船し、沖縄県での3日間のプログラム概要を紹介するオリエンテーションを実施した。PYはバンコクを出港して最初の寄港地ということもあり、興奮と高揚感に包まれる場となり、沖縄プログラムの大成功を予感させる時間となった。

首里城見学ツアー

午後は世界遺産でもある首里城公園を訪れた。学校法人興南学園・興南中学校および高等学校のアクト部メンバー総勢45名と合流し、挨拶とオリエンテーションを終えたあと、アクト部メンバーが各LGにおよそ3名ずつ入ってガイドツアーがスタートした。

自己紹介等のアイスブレイクから始まり、2026年秋の完成を目指して復元工事の進む首里城を、アクト部メンバー自作のフリップ等も用いながら英語にて説明した。

PYは、沖縄の歴史や文化の象徴でもある首里城への興味関心を示すのはもちろん、地元の中高校生との交流が大いに盛り上がり、最後は大きく手を振りながら別れを惜しみつつ首里城を出発した。

(2) 2日目の午前中は、二つのLGごとに沖縄の自然や文化・地域を体験できる場所へ訪問し、活動を行った。

さんご畑(沖縄の海とさんご)

世界で初めてさんごの陸上養殖に成功したさんご畑にて、さんごや海洋環境についての理解を深めた。また、ビーチクリーンにてマイクロプラスチックを調査し、海洋ごみと自分たちのライフスタイルを見つめなおした。これらのワークショップを通して、美しい海を守り続けていくために自分たちにできることは何かを考える時間となった。

宜野湾区公民館(沖縄の民具づくり)

沖縄の生きるチカラ調査隊スタッフの指導のもと、沖縄の植物で作られたボウルやほうきなどの民具が紹介された。その後、沖縄に自生するアダンの葉を使った笛やボウル作りを行った。さらに、沖縄では至るところで目にする月桃について、その効能や民具・染料として活用されていることを学んだ後、月桃の葉で包んだ伝統的な蒸し餅であるムーチーを作った。これらの体験を通して身近な植物を活かした沖縄の生活の知恵について理解を深めた。

長田区公民館(エイサー体験)

担当実行委員メンバーから沖縄の歴史と文化を学んだ後、ワークショップで旧盆とエイサーの意味をPYが考え、寸劇等で紹介した。その後、長田青年会によるエイサー演舞を鑑賞し、大太鼓や締太鼓、手踊りのパートごとにチームに分かれてエイサーの指導を受け、最後は青年会

メンバーとPY全員でエイサーの合同演舞を行った。また、青年会という社会教育団体のあり方や伝統芸能について、青年会メンバーとPYが意見交換、情報交換を行った。

糸満海人工房資料館(サバニの大漁旗づくり)

水中メガネの原型とされる糸満発祥のミーカガンをはじめ、沖縄の海人(漁師)ゆかりの道具類を集めた施設資料館である糸満海人工房を会場として、NPO法人ハマスーキのスタッフによる、沖縄の海人文化の解説が行われた。その後、豊漁や航海安全を祈願して作られている大漁旗の説明を受けたあと、LGごとに2枚の生地が渡され、デザインや盛り込みたい文言などを考えながら、個性的・芸術的な4枚の大漁旗が誕生した。

繁多川公民館(島豆腐づくりと地域交流)

NPO法人1万人井戸端会議のスタッフの指導のもと、繁多川地区で長年栽培が行われている在来大豆を活用した島豆腐づくりに挑戦した。浸水させた大豆を挽き、それを絞った豆乳を大鍋で煮た。待ち時間を利用してPYは繁多川地区の集落を散策し、地域住民たちとの交流を通して、地域の暮らしを垣間見た。その後、煮立った豆乳ににがりを入れてゆし豆腐を作り、全員でゆんたく(おしゃべり)を楽しみながらできたての島豆腐料理に舌鼓を打った。

漫湖水鳥・湿地センター(マングローブ体験)

ラムサール条約にも登録されている漫湖水鳥・湿地センターにて、マングローブをはじめとする湿地環境が生物多様性に与える影響についてレクチャーを受けた。適度にマングローブを間引くことがより適正な環境の維持につながることから、稚樹を抜く体験を行った。その後、沖縄の伝統工芸に関する交流施設でもあるおきなわ工芸の杜に移動し、間引いたマングローブを活用したアップサイクルの一環として、アクセサリ作りにも挑戦した。

沖縄尚学高等学校(国際バカロレア、茶道体験)

学校法人尚学学園沖縄尚学高等学校を訪問し、まずは空手部の生徒たちが沖縄発祥の琉球空手の形を披露した後、PYがその演舞に挑戦した。さらにLGごとに、茶道部による茶道体験と、国際バカロレア認定を取得している国際文化科学コースの教室訪問を行い、生徒たちとの交流を深めた。地元の高校生たちのリアルな雰囲気に浸り、顔の見える等身大の国際交流の時間が生まれた。

平和を考えるワークショップ

午後は、全PYで沖縄県立読谷高等学校の体育館に移動し、読谷高等学校の生徒たちによる歓迎の歌の出迎えを受けた。沖縄の美しい自然や豊かな伝統文化だけでなく、悲しみや痛みの歴史もまた沖縄だからこそ学べる価値で

あるという観点から、株式会社うなゑ沖縄による平和を考えるワークショップが行われた。まず、読谷村のチビチリガマで戦時中に起きた実話を元に設計されているシミュレーションが実施された。

PYは、大小どちらのガマに逃げるのか、何を手にするのか、誰と一緒に行動するのかといった問いに自分なりの考えで動き、その都度なぜそう判断したのかをシェアした。正解がない中、それぞれの価値基準の多様性を改めて実感できる時間となった。

さらに戦後、読谷村で起きた米軍による土地の接収の解説を聞いた後、沖縄の高校生たちが作成した「戦争を起こさない・起こさせないための10のアクション」を参考に、参加国ごとに母国語で自分たちが考えるアクションについての意見交換が行われ、全体への共有を行った。

最後に、読谷高等学校の生徒たちが読谷村出身の歌手Kiroroの玉城千春氏が作詞作曲した「未来へ」を歌った。

また、PYから感謝の気持ちを伝えるスピーチと記念品が贈呈され、平和を尊ぶ気持ちは国籍や文化・世代を超えて普遍的なものであることを全員が体感する貴重な時間となった。

(3)最終日の3日目は、全PYで沖縄科学技術大学院大学(OIST)と国際通りを訪れた。

沖縄科学技術大学院大学(OIST)

60を超える国と地域から研究者や大学院生・インターン生などが集まっているOISTを訪問し、まずは加藤重治事務局長兼副理事長より、OISTの紹介プレゼンテーションが行われた。その後、今回のプログラムに参加するOISTの大学院生・インターン生・スタッフ等14名のOISTersが紹介され、LGごとの対話セッションがスタートした。

対話セッションでは、それぞれの自己紹介の後、SWYとOISTの共通項としての「異文化理解」や「多様性の尊重」などについて、多角的な意見交換が行われた。また、PYやOISTersだけでなくローカル・ユースたちも等身大の

考えや視点を素直に語り合いながら、互いの考えや価値観を聴き、認め合う時間となった。

その後、各LGで話し合われたことを全体で聴き合い、PYが感謝の気持ちを伝えるスピーチを行った後、全員での集合写真を撮影した。

国際通り

OISTから那覇市内に戻り、国際通りエリアにてLGごとに2時間のフリータイムが設けられた。昼食よりも買い物や最先に行動するLGや、全員で沖縄料理のレストランに入店して昼食と交流を楽しむLGなど、各LGの個性やコミュニケーションの質感が垣間見え、バンコクを出港して10日過ぎる中、LGメンバーのチームビルディングがどんどん高まっていることを実感できる時間となった。

フェアウェルセレモニー

帰船後、全プログラムの締めくくりとしてのフェアウェルセレモニーを実施した。

まずスライドを用いながら3日間のスケジュールを振り返り、感じたこと・学んだことをPYやローカル・ユースたち3、4人ずつの小グループで共有した。その後、全体への発表が行われ、イチャリパチャオーデー（「一度会えば、皆兄弟」という意味）や万国津梁（「世界の架け橋」という意味）といった沖縄が世界に発信する価値観の体現が行われた。

その後、実行委員によって作成された3日間の活動の動画上映が行われ、全員が3日間で得た感動や学びを改めて味わう時間となった。

最後に三線の演奏により沖縄の伝統的な歌を全員で合唱し、さらに喜びを分かち合いかき混ぜる意味のカチャーシーで全員が踊り合い、船内に万雷の拍手と歓声が響き合った。

多くのPYより、地域訪問活動を通して、沖縄県で貴重な経験ができ、充実した学びの体験となったという意見があった。

3 ナショナル・プレゼンテーション

National Presentation (NP) was conducted by delegations to present each participating country's history, culture, tradition, politics, economies, and society to deepen understanding of each country. Also, it was an opportunity

for participants to rediscover the characteristics of their own countries. The delegation decided the presentation format and NP Committee was in charge of operations, MC, and time management.

<Order of NP>

Date	Delegation
Feb. 18	New Zealand
	Canada
	Palau
Feb. 19	Cameroon
	Greece
	Mozambique

Date	Delegation
Feb. 20	Mongolia
	Chile
	Spain
Feb. 21	Jamaica
	Dominican Republic
	Japan

<Outline of NP>

Cameroon
<p>Known as Africa in miniature, Cameroon is the heart of Central Africa and is a country of nearly 28 million people. It is bordered by Nigeria, Chad, Central African Republic, Gabon, Equatorial Guinea and the republic of Congo. In Cameroon, the official languages are French and English, making Cameroon a bridge between cultures. Cameroon's history began with Portuguese explorers in 1472, who named the Wouri River Rio dos Camarões (river of prawns). Colonized by Germany in 1884, the territory was later divided between France and Britain after World War I, creating a bilingual identity. Independence was declared in 1960, followed by reunification in 1961. In Cameroon, the cultural diversity is expressed through four major areas:</p> <ul style="list-style-type: none"> - Sawa (coastal): people of the water celebrated in the UNESCO-recognized Ngondo festival - Grassfields (west): known for kingdom, beadwork, and vibrant festivals such as Nguon - Fang beti: rich in oral traditions, sculptures, and farming communities - Sudano-sahelian: Islamic-influenced societies, mud-brick architecture, and pastoral lifestyles <p>Tradition emphasizes hospitality, respect for elders, and social cohesion. Arts flourish with makossa, bitksi, assiko and toghu fabrics, while gastronomy features iconic dishes such as ndole, eru, okok.</p> <p>Today, Cameroon balances modernity, and heritage. Urban skyscrapers coexist with traditional palaces, while the economy relies on agriculture, oil services, and emerging projects. To know Cameroon is truly to know the heart of Africa.</p>
Canada
<p>The presentation started with Canadian PYs' road trip in Vancouver, headed to a pow-wow, a Native gathering on the East Coast of Canada. They then travelled to Saskatchewan, taught a song by singing together in Plains Cree, with words such as thank you, have some tea, and sit down. Then, they talked about multiculturalism in Canada and travelled to Toronto to play a game of hockey with an audience member. Then, they talked about how French is used in Eastern Canada, and Canadian brands such as Tim Hortons. They travelled to Niagara Falls, and shared that many popular songs are written by Canadians, such as Call Me Maybe (Carly Rae Jepsen), My Heart Will Go On (Celine Dion), and Blinding Lights (The Weeknd). They then talked about different kinds of Canadian food, such as Nanaimo bars, Timbits, Japadogs, California Rolls, Hawaiian Pizza, and more! Then, a Canadian wearing a traditional jingle dress came out to dance, and they conducted an intertribal dance where everyone was invited to join the dance party.</p>

Chile
<p>The presentation opened with an extract of a Chilean musical “La pérgola de las Flores”. The story followed “Carmella” who just arrived at the capital city Santiago and was invited to travel through Chile and took pictures of the landscape. She arrived in the Central zone where they celebrate national Independence Day and dance “Cueca”. Then she arrived in the Southern zone where a local talks about the region and then danced a southern waltz (vals). After that she went to Rapa Nui Island, where locals do the “Rapa Nui dance”. She finally traveled to the North zone where a “Pawa” ceremony is held to commemorate the beginning of the “Carnival with the strength of the Sun”: “Membrillazo” is danced by the locals and to conclude a “Cacharpaya” is danced with some people of the public. It ended with everyone dancing to “Dubidubidu (Chipi Chipi Chapa Chapa)”.</p>
Dominican Republic
<p>First, PYs opened with the “Breaking News SWY” segment, a dynamic and humorous introduction where they shared with the audience the challenges and excitement of finally arriving at SWY after their flights were delayed. This segment set the tone for the evening, showing resilience, teamwork, and the strong motivation that brought us together despite unexpected obstacles.</p> <p>Second, they presented an engaging video summarizing what the Dominican Republic has to offer today: a vibrant tourism-driven economy, rich natural landscapes, and a forward-looking vision shaped by a digitalized, youth-led future. The video highlighted innovation, entrepreneurship, and the cultural pride that defines their nation in the modern era. They then moved on to showcase their culture through interactive displays featuring iconic Dominican characters: a surfer representing their coastal lifestyle, a baseball player symbolizing their passion for the sport, a Califé from the carnival embodying folklore and creativity, and a presentation of our traditional national dance costume. Each character interacted with the audience, bringing their culture to life.</p> <p>Afterwards, they performed two dances that have gained global recognition: bachata and merengue. These were introduced through a couple’s dance and followed by an original song created especially for SWY.</p> <p>Lastly, they invited NLs from all delegations to join PYs from Dominican Republic on stage with their flags, culminating in a joyful Mangulina dance celebrating unity among all nationalities.</p>
Greece
<p>Greece National Presentation aimed at presenting Greece through the engaging form of theatre alongside a quiz with the audience, fun facts, and last but not least, a dance. Greek PYs aimed at conveying Greece’s cultural and historical legacy through acting out an allegorical travel through time where they stop at Greece’s most important historical events such as the birth of mythology and theatre, the birth of philosophy, the birth of the Olympic games, the birth of democracy, and finally the beginning of the modern Greek state. Throughout the presentation they played Greek ancient music (Harp mostly) to accompany the play and create an immersive experience. Additionally, during the “sailing scenes” they played audio which was recorded from their travel on the MS Nippon Maru, making the experience even more in accordance with their travels! They wanted to convey that this journey they were on, on the MS Nippon Maru, resembles that of Odysseus on his journey back to Ithaca. In his journey, he encountered many difficulties which disguised themselves as opportunities which allowed him to exercise his virtue and live through a transformative experience and in turn come out of the journey as a changed, better person. Hence, they understood their travels on the MS Nippon Maru in the likes of the Odyssey where all PYs were presented with an opportunity to lead the experience affect them profoundly and be the spark that ignites initiative inside them to lead the change. Furthermore, their presentation was intended to also show their gratitude to the audience by handing out five small gifts through a small quiz whose answers were given in the interlocution by the MC. They concluded with some fun facts about their country’s culture and geography to show some bits and pieces of interesting information about Greece that often remain unnoticed. Finally, they concluded their National Presentation through a dance, syrtaki, a very well-known and recognizable dance accompanied by the famous song from the film ZORBAS.</p>

<p>Jamaica</p>
<p>First, a presentation was played where the TV host introduced a segment called a “A Likkle Journey Through Di World” on the TV show “Jamaica Beam.” It was a segment that detailed how Jamaica’s musical evolution is tied to its history from pre-colonial days to now. The TV segment is narrated by two characters, Mas Fitz and Ms. Maggy, who are both elder characters and their narration was accompanied by a visual presentation.</p> <p>The first part of the segment spoke on how the folk stories from their pre-colonial days and the rhythms from Jamaica’s early colonial days helped to influence the creation of Mento. Jamaican PYs then danced to Mento music, specifically, the song “Hill and Gully Rider.”</p> <p>The second part gave the history of Ska and Rocksteady and tied it to Jamaica’s late colonial days to Emancipation period. The delegation performed to the Ska song, “Simmer Down” from Bob Marley and the Wailers then the rocksteady song, “Rocksteady” by Alton Ellis. They then entered the reggae period which embodied the peacefulness of Jamaica’s Early Independence era where the delegation performed to “Jammin” by Bob Marley. The Dancehall era was tied to Jamaica’s Independence period to current day as the delegation danced to Old Dancehall – “Bogle” by Buju Banton and New Dancehall – “Fling” by Ding Dong. This was a story that detailed Jamaica’s history where Mento arose from their pre-colonial to early colonial days, Ska and Rocksteady from Jamaican late colonial to early Emancipatory period, Reggae from their late Emancipation to Early Independence era and Dancehall for their Independence era to now.</p>
<p>Japan</p>
<p>Japan’s NP followed two SWY participants on a time-travel journey to discover "the four hearts" needed to transform a meeting into a lasting bond.</p> <p>In the PROLOGUE, a mysterious guide tasked them with gathering four hearts. On the SWY ship deck (OPENING), they discovered a blue fan representing Curiosity and fell into a time vortex.</p> <p>In Part 1, they arrived in old Japan, experiencing traditional games (hanetsuki, spinning tops), koto music, calligraphy revealing "Ichigo Ichie" (once-in-a-lifetime encounter), taiko drumming, and martial arts. A master awarded them the black fan (Respect).</p> <p>In Part 2, after witnessing footage of global conflicts, a young villager asked if connection was still possible amid destruction. They answered with "Hope" and received the white fan.</p> <p>After a time-leap showing Japan's post-war recovery, Part 3 celebrated modern Japan through sanshin music, "Hana wa Saku" chorus, and an energetic Yosakoi dance. A festival leader awarded the red fan (Passion).</p> <p>In the ENDING, the four fans united into a circle, revealing the kanji "縁" (EN/bond). Japan’s main message was true connection required Curiosity, Respect, Hope, and Passion. The cast and audience sang "Imagine" together, affirming that encounters became lasting bonds when nurtured with these four hearts.</p>
<p>Mongolia</p>
<p>First, the performance opened with an introduction to Mongolia, the Land of the Eternal Blue Sky, highlighting its vast steppes, mountains, rich traditions, and unique cultural heritage.</p> <p>Next, the story began by traveling back to the origins of Mongolian civilization, starting with the Hunnu Empire Era, followed by Shamanism, then moving into the 13th Century: The Rise of the Mongol Empire, continuing with Naadam Festival, 20th Century Mongolia and the ballet “Uran Khas”, 1990s Democratic Mongolia, and concluding with a surprise segment that connects the past to the present.</p> <p>The main message of Mongolian National Presentation was: “Through every era, Mongolia has preserved its spirit, identity, and unity and this strength continues to guide us into the future.”</p> <p>The reason for choosing this message was that Mongolia’s history is one of resilience, transformation, and cultural pride. From ancient nomadic empires to modern democratic society, Mongolians have continuously overcome challenges while maintaining their traditions and national identity.</p> <p>Through this historical journey, the audience witnessed how Mongolia’s spirit has endured across centuries from the Hunnu Empire, through the era of Chinggis Khan, to the democratic movement of the 1990s. This National Presentation was not only a showcase of historical milestones, but also a heartfelt story of perseverance, cultural pride, and hope for the future.</p> <p>It told the story of Mongolia’s past while inspiring strength and unity for today and tomorrow.</p>

Mozambique
<p>Mozambique’s presentation began with the speech of President Samora Moisés Machel, when he was proclaiming the independence of Mozambique. Followed by a storytelling of the history of the country’s name, historical overview, and the richness of each region of Mozambique (North, Centre and South).</p> <p>Next, the delegation presented a mix of two traditional dances: marrabenta and limbonde.</p> <p>Finishing with a modern musical genre, pandza, sharing the joyfulness of Mozambique’s youth with other PYs.</p> <p>The main goal with Mozambican NP was to express how Mozambique is a land of many voices, many rhythms, and many colors with North, Central and Southern sides, each carrying its own stories, traditions and pride.</p> <p>As the Mozambican delegation, they stood united under their motto: "Unity in Diversity, Strength in Culture." They believe Mozambican diversity does not divide people but defines them.</p> <p>For the Mozambicans culture, languages and heritage are their strength, and that’s the perspective the delegation expected to share on the NP.</p> <p>With pride in Mozambican roots, passion in their hearts, and gratitude for this opportunity, they stepped forward to connect, to contribute, and to celebrate the power of youth across borders.</p>
New Zealand
<p>The presentation opened with a “Pōhiri” (welcome ceremony) symbolising the diversity of people in New Zealand which pays tribute to those who have traveled and settled in Aotearoa (New Zealand) and call it home. The presentation was in segments representing each of PYs and their culture, the genealogical connection to their own heritage and homeland whilst embracing their new soil of Aotearoa and how it nourishes them to thrive as people.</p> <p>The main theme of New Zealand NP was “Kotahitanga” (Unity), weaving PYs’ differences whilst keeping each strand intact, an indigenous Maori “whakatauki” (proverb) that they used as a foundation for their NP is “Raranga ai te Tira, kia hua ko te Rangatira” - Let them weave the people, so that chiefs may bloom.</p> <p>New Zealand delegation felt this was an appropriate theme, as SWY37 was the collaboration of many countries, that from the blessings of Japan. They had the opportunity to sit amongst each other, learn of their similarities and differences to make impacts in their communities.</p>
Palau
<p>The opening scene was led by one PY from the Palau delegation blowing a conch shell as people do in Palau when beginning any official gatherings and events. This was then followed by other PY with an opening chesols, a traditional chant. Afterwards, all Palau delegation members began their oral presentation with two speakers who welcomed the audience and gave a brief geographical explanation of where Palau is located, its population, and what their flag symbolized. Then, PYs further discussed how community is the center of life in Palau, the flow through generation is valued, and the sense of responsibility of each individual is strong, as well as the diverse mix of nationalities that creates a multicultural society. Following this, PYs dove into the topic of culture— storytelling, art, and traditional money, all of which is “not just remembered but lived. “PYs then discussed traditional roles of men and women in their society, fishing and farming, and how they balance that with the protection of the environment, both traditionally and in modern conservation. Lastly, PYs shared the Palau Pledge, an initiative to protect Palau’s environment for the children of Palau, by the children of Palau — showing two videos. PYs concluded the presentation by reiterating that “their stories, values, and responsibilities are vast and their culture is lived”; they invited the audience “not just to visit Belau, but to feel it.”</p>
Spain
<p>As Spain is a diverse country, during the presentation, Spanish delegation made a journey through nine different regions of Spain to show the culture, landscapes and traditions on each of them.</p> <p>The regions that PYs showed during the presentation were: Galicia-Madrid-Cataluña-Islas Baleares-Navarra-Asturias-Murcia-Andalucía.</p> <p>For the presentation, PYs used videos of the regions, traditional dancing and storytelling.</p> <p>To sum up, what they aimed to show with their presentation was that, from North to South, from the mountains to the sea, Spanish landscapes change constantly, but one thing remains a strong connection between people. Above all, Spain is a place for encounters, between past and future, tradition and innovation, local roots and global connections.</p>

4 ピア・ラーニング・セミナー

◆概要

ピア・ラーニング・セミナー (PLS) は、PYが主催するセミナーで、一つのPLSは75分で全6コマ行われた。

全PYは、PLSの各コマにおいて、主催者あるいは参加者となる。主催者以外のPYは、当日参加したいPLSに自由に参加することができる。PLSの運営はPLS委員会が担当した。

PLSは、主催者自身の学習分野や経験をPYと共有し、議論する活動として、次のことを目的として実施された。

【主催者】

- ・ 自らの考えや経験などを伝えることによりプレゼンテーション能力を高めること
- ・ PLSの企画・立案から実施、参加者からのフィードバックまでの一連のプロセスを経験することによりプロジェクト推進能力を高めること

【参加者】

- ・ 主催者の考えや経験などが共有され、お互いのバックグラウンドをより深く知ることができること
- ・ 主催者の運営方法からワークショップやディスカッションの効果的な実施方法を学ぶこと

また、主催にあたって、以下の四つの項目に該当する活動であることが必要条件とされた。

- 1) 社会貢献性のあること
- 2) 地域や国家の境を超えて、国際的な意義が認められること
- 3) 参加者の異文化理解を促進し、視野を広げる一助となること
- 4) 国際交流や国家間協力の促進を促すこと

今年は29のセミナーが開催された。

[PLS一覧]

Seminar name	Organizer ID	Goal	Lessons learned as organizer
AI Awakens Youth Leadership	NZL-8 NZL-6	To share personal journeys as indigenous leaders and connect participants with their true selves rooted in nature. Raising awareness of Māori concepts and encouraged protecting cultural heritage and natural environments.	Successfully raised global awareness on forced displacement and indigenous rights. Celebrated resilience and received inspiring feedback. Deeply valued the engagement, support, and active listening from the participants.
Navigating Idioms in English and Beyond	CAN-7	To engage participants of varying English proficiencies in learning idioms in an inclusive environment. Aimed to expand lexicons, highlight cultural similarities, and demonstrate that idioms cannot be understood literally.	Gained valuable experience catering to a diverse audience. Appreciated the honest, constructive feedback from participants, which helps improve future facilitation skills and validated the effectiveness of the multi-method delivery.
Visual Culture: a Road to Well-being	DOM-2 DOM-NL DOM-1 DOM-5 DOM-8 DOM-7	To transform participants from consumers to mindful observers, providing logical and emotional methodologies to decode images. Highlighted how art analysis develops critical thinking, self-knowledge, and emotional resilience.	Discovered youth's deep interest in exploring mental health through unconventional paths like pop culture. Felt proud of the team's adaptability to audience energy and validated by the participants' strong engagement.

Seminar name	Organizer ID	Goal	Lessons learned as organizer
What is Sustainable Waste Management?	JPN-46	To encourage proactive thinking about building sustainable environments. Shared global waste issues to help participants connect global challenges with daily lives and initiate concrete personal actions through open discussion.	Realized waste problems are universal, requiring shared global cooperation. Learned the importance of collaboration in seminar design: involving knowledgeable participants beforehand and having a clear vision would have enhanced the session.
Beyond the Memories	JPN-45	To move beyond historical facts and connect past memories to current global challenges. Fostered empathy and inclusive understanding, empowering participants to reflect on how they can actively contribute to peace-building.	Reflected deeply on communicating historical memory cross-culturally. Realized peace is shaped by individual contexts, not a universal concept. Enhanced leadership skills while proving cultural practices effectively build mutual emotional understanding.
The Beauty of Kimono: History and Identity in Japanese Tradition	JPN-66 JPN-26 JPN-70 JPN-19 JPN-17 JPN-50	To present kimono as a living expression of Japanese identity, harmony, and seasonal awareness. Used experiential learning to foster cross-cultural understanding and empower youth to proactively preserve their cultural heritage.	Learned the power of experiential learning; visual experiences create deep emotional connections. Strengthened teamwork and facilitation skills, realizing that cultural preservation is an active, shared global challenge requiring youth leadership.
THEATRICAL COMMUNICATION towards EMPATHY	JPN-76	To introduce the relationship between theater and intercultural understanding. Aimed to share methods for enhancing empathetic communication during onboard activities and gain new insights from the diverse perspectives of participants.	Surprised by participants' enthusiastic engagement despite cultural or linguistic barriers. Gained confidence in facilitation and acquired new perspectives on using theatrical arts for intercultural exchange, fueling motivation for future exploration.
Bridging History and Cultures	JPN-41 JPN-55	To deepen understanding of diverse perspectives on historical transmission. Emphasized the value of dialogue over finding a single solution, encouraging participants to reflect on how narratives are shaped in diverse societies.	Realized the immense value of participant-driven dialogue; diverse viewpoints expanded personal understanding and challenged assumptions. Learned that effective organizing requires flexibility to explore unexpected ideas, creating a space of mutual growth.
Rethinking Identity Through Culture and Life Experience (Culture and Self-development)	JPN-62	To create a respectful space for reflecting on complex personal identities. Aimed to build empathy, normalize feelings of confusion in international settings, and support ongoing personal growth beyond stereotypes.	Gained confidence as a facilitator through positive feedback on clear structure. Discovered that effective facilitation involves active listening and allowing participants' meaningful personal stories to drive the collaborative learning experience.
Touch, Smell, Rise: Experiencing Yeast and Fermentation Across Cultures with Student Baker Yui	JPN-72	To increase knowledge about yeast and demonstrate how fermentation forms an integral part of various cultures. Aimed to provide an entertaining and practical learning experience through interactive experimentation.	Realized how interaction and practical experiments make seminars engaging. Participants' positive reactions to the novel experiment and the host's passion for baking highlighted the joy of sharing in-depth knowledge.

Seminar name	Organizer ID	Goal	Lessons learned as organizer
Philosophizing like Socrates	GRC-8	To spark curiosity and natural wonder by engaging participants in philosophical dialogue. Aimed to practice critical thinking, active listening, and respectful discussion on sensitive societal issues, encouraging exploration beyond the seminar.	Improved public speaking and the ability to explain complex concepts simply. Enhanced project management and emotional intelligence through debate moderation. Deepened cultural awareness and appreciated the challenge of philosophical argumentation.
Building with the Environment	CAN-3	To introduce diverse architecture and encourage participants to reflect on their own surroundings, considering the cultural stories and environmental factors embedded in the buildings of their own cultures.	Gained a deeper appreciation for personal cultural backgrounds and local architecture. Learned how to leverage structural engineering knowledge to effectively lead engaging, accessible workshops for diverse learning levels.
Global Perspectives on Healthcare Systems: Challenges, Strengths, and Opportunities for Collaboration	JPN-36	To understand, compare, and explore collaborative opportunities among global healthcare systems. Aimed to provide a realistic view of Japan's strengths and challenges, encouraging participants to reflect on their own societal contexts.	Successfully promoted interactive learning using sticky notes to overcome language barriers. Realized healthcare issues are deeply tied to cultural norms. Identified areas for improving English proficiency and administrative project management.
Between Words: Speak Before You Think	GRC-6	To enhance fluency and persuasiveness in speech by eliminating fillers. Aimed to explore cross-culturally how people instinctively conceptualize and verbalize abstract values and feelings without any prior preparation.	Improved adaptability and communication skills by explaining rules in English. Felt fulfillment from pushing participants out of their comfort zones. Realized that teaching reinforces personal skills and recognized the value of sharing techniques.
Mongolia & the World: Shared Wisdom for Sustainable Futures	MNG-2 MNG-5	To create a peer learning space for exchanging perspectives on sustainability. Aimed to show there is no single approach to environmental challenges and empower youth to reflect on their roles.	Discovered that personal stories create comfortable, engaging spaces. Validated combining discussion with interactive games. Improved facilitation skills and appreciated how diverse cultural contexts shape different, valid approaches to sustainability.
“THE FOUR CULTURAL AREAS OF CAMEROON” A Journey Through the History and Rich Diversity of the "Hinges of Africa"	CMR-1 CMR-2 CMR-3 CMR-5 CMR-8	To share the rich history, cultural diversity, and traditions of Cameroon. Aimed to instill pride, introduce local music and arts, foster friendship, and facilitate mutual cultural exchange among all participants.	Built friendships and self-confidence in public speaking. Improved English language skills and gained valuable insights from the diverse backgrounds and practices of the participants in a highly joyful environment.
Live Hard, Die Old. Youth Action for a Sustainable Future	ESP-7 ESP-1	To convey how connecting with nature improves personal health and the planet's well-being. Aimed to inspire young leaders to incorporate these holistic sustainability approaches and nature expeditions into daily actions.	Developed strong leadership, organizational, and online coordination skills. Fostered a professional network and long-lasting bonds. Initiated plans for post-ship SWY nature expeditions, successfully connecting diverse cultures through shared knowledge.

Seminar name	Organizer ID	Goal	Lessons learned as organizer
Astronomy: Heritage and the Future of Space Industry	CHL-7 CHL-1 CHL-8	To share the fundamentals of astronomy, showcase Chile's privileged skies, and explore indigenous celestial narratives. Aimed to provoke critical discussion on the sustainable stewardship of space and dark sky preservation.	Realized stars connect everyone regardless of background. Discovered young leaders hold strong opinions on space colonization, advocating for international collaboration, centralized boundaries, and global involvement for a sustainable future.
Making Decisions in Disasters: Evacuation and Shelter from a Public Health Perspective	JPN-35	To teach evacuation prioritization (WATCHPPP) and global shelter standards. Aimed to highlight ongoing issues in Japanese shelters, emphasize universal vulnerability to disasters, and show that reaching a shelter is just the beginning.	Navigated the unique force majeure of ship conditions (heavy waves). Gained immense confidence from successfully presenting specialized medical knowledge in English, helping clarify future academic career paths based on participant satisfaction.
Non-Violent Communication for Conflict-Resolution and Peace Building	GRC-7 GRC-4	To equip participants with NVC skills to transform conflicts into opportunities for cooperation. Aimed to empower them to apply practical techniques to foster peace and mutual respect in personal and community contexts.	Reflected on powerful engaging methods and improved communication and presentation skills. Deepened personal knowledge of NVC through research and witnessed the effectiveness of role-play in disseminating complicated sociological concepts.
Food and Future: Thinking about Agriculture and Food Production as Our Own Issue	JPN-49 JPN-28	To deepen understanding of Japanese food culture's philosophies (respect, gratitude) and scientific aspects. Aimed to raise awareness of agricultural challenges while fostering cross-cultural dialogue to discover universal connections through food.	Developed strong teamwork and leadership skills. Deepened cultural understanding by teaching it. Discovered fascinating global variations in pre-meal gratitude customs and confirmed that hands-on experiences powerfully transcend language barriers.
Entrepreneurship for everyone	GRC-3	To convince youth that entrepreneurship is a tangible tool for making ideas a reality, not an inaccessible concept. Aimed to provide an easy, comprehensive toolbox for executing projects in the real world.	Improved public speaking and adaptability. Found deep fulfillment in helping participants step out of their comfort zones. Realized that sharing seemingly simple methodologies can be profoundly useful and empowering to others.
Roots That Still Lead: Understanding Matrilineal Society Structure	PLW-1 PLW-NL PLW-3 PLW-8 PLW-6	To foster understanding and acknowledgment of Palau's matrilineal system. Aimed to highlight how this living foundation shapes leadership and character, inspiring respect for cultural systems balancing tradition with modern governance.	Developed confidence and pride as a representative of Palau. Strengthened public speaking and facilitation skills by managing dialogue. Deepened personal understanding of the relevance and strength of Palau's traditional systems today.
Teaching in Japan: Life Inside a Japanese School	JPN-62	To clearly explain Japanese school life and the dual nature of teaching. Aimed to encourage participants to reflect on how social and cultural contexts shape education and student behavior in their own countries.	Gained presentation confidence through positive feedback on clear explanations. Learned the importance of time management, flexibility, and prioritizing key information for an international audience, strengthening overall educational facilitation skills.

Seminar name	Organizer ID	Goal	Lessons learned as organizer
Educational Equity in Jamaica: Confronting the Challenge of Geographic Isolation	JAM-5	To foster cross-cultural understanding of geographic educational inequity. Aimed to show that isolation is driven by resource allocation. Used the quiz to simulate the emotional frustration of unfair systemic educational circumstances.	Gained global perspectives on policy frameworks dismantling inequity. Realized simplistic policy borrowing fails against Jamaica's unique constraints. Deeply valued the emotional understanding and shared international awareness generated by the quiz activity.
Rethinking Capitalism and Our Future	JPN-51 JPN-17 JPN-44 JPN-29 JPN-50	To raise awareness of how capitalist structures drive global social problems. Aimed to maintain neutrality, encourage participants to express their own ideas, and foster a sense of ownership to imagine a solved world.	Learned that leadership requires courage and relying on excellent team members. Recognized the need for simpler storytelling and better discussion support. Deepened academic understanding of capitalism and improved structural facilitation skills.
The Long Game of Innovation: Starting Small, Thinking Big	GRC-5 GRC-1	To highlight the impact of discipline, cooperation, and mentorship on career success. Aimed to create a safe space for participants to reflect on early impulses, find inner motivation, and realize shared struggles.	Improved communication skills in a second language and overcame anxiety. Adapted content dynamically. Gained diverse perspectives on defining success and child-rearing, receiving motivating feedback to continue personal and professional development.
Intercultural Education in Action—Connecting Cultures, Shaping Futures	JPN-43	To identify elements of intercultural education that enable empathy in diverse societies. Utilized the diverse SWY environment to ground the concept in actual participant experiences, rather than theoretical approaches alone.	Realized teaching empathy requires a foundation of actual diverse experiences; theory alone is insufficient. Motivated to explore layered educational approaches based on students' prior international exposure, reinforcing passion for the education field.
Language Reclamation in Canada; Language, Identity and Community	CAN-6	To understand the causes of language loss and explore reclamation strategies. Aimed to encourage critical thinking, empathy, and empowerment, helping participants recognize the value of linguistic diversity and support community revitalization.	Learned the value of intentionally welcoming native languages to create inclusive spaces. Recognized the importance of sharing historical truths. Identified areas for facilitation improvement, such as asking clearer follow-up questions and managing transitions.

5 委員会活動

事業期間中、参加青年は様々な行事・活動を主体的に企画・実行した。これは、参加青年が異なる文化やバックグラウンドを持った人と共に活動を創り上げることで、

主体性を育むだけでなく、相互理解を促進し、良好な関係を築くことを目的としている。活動を行うために参加青年は下記の五つの委員会のうちいずれかに所属した。

5.1. クラブ活動委員会

クラブ活動委員会は、クラブ活動全体のスケジュール管理や運営方法について検討し、参加青年からの開催希望の集約、開催場所や開催時間、クラブ内容の調整を行った。クラブ活動直前には悪天候や船の揺れを理由とする

開催場所変更や、それに伴うクラブ活動開催者との調整が多く発生したが、委員会のメンバーが密接な議論を行ってこれらの課題を解決し、クラブ活動の実施を成し遂げた。

5.2. ディスカッション委員会

本委員会の役割は、愛知県での地域実践活動のCo-Creation Conference (CCC) の進行とサマリー・フォーラムの企画・運営である。愛知県での地域実践活動のCCCとは、愛知県で行われた地域実践活動で学び、経験したことやその地域の課題解決の案を愛知県実行委員に発表する場である。サマリー・フォーラムとは、対面交流中のCDでの学びと事業終了後のアクションについて、CDごとに発表する場である。サマリー・フォーラムの主たる要素がCDごとの発表であるため、委員会で慎重に当日

の進行について議論した。各CDから貴重な学びや体験談を発表してもらうこと、円滑に会を進行することの双方を問題なく行えるように配慮した。

サマリー・フォーラムの後にディスカッション委員会が開催したイベントでは、ファシリテーターとともに、ディスカッション委員会主導のパネルディスカッションが行われた。各CDから1名ずつパネリストが参加し、CDに関する意見や振り返りに関するパネルディスカッションを行った。

5.3. イベント委員会

イベント委員会は、レター・グループ・アクティビティとスポーツフェスティバル、フェアウェル・フェスティバルの運営を行う委員会である。

レター・グループ・アクティビティ

船上活動前半に、LGの親交を深める目的で実施された。船内の3か所をLGごとに回り、それぞれのお題をクリアするという形式で行われた。お題は、絵描き連想ゲーム、ウソホントゲーム、ジェスチャーゲームの三つがイベント委員会メンバーによって異なる場所で実施され、それぞれのお題をクリアする中で、LGの結束を高めることができた。

スポーツフェスティバル

参加青年を紅組と白組の二つに分け、紅白対抗戦方式でスポーツフェスティバルが行われた。船内という限られた場所を使ったゲームはすべてイベント委員会により

考案及び運営され、PYは大いに楽しんだ。

あいにくの悪天候のため当初予定していたスポーツデッキからドルフィン・ホールへと会場を変更しての開催となったが、綱引きと玉入れという二つのゲームが実施された。綱引きでは紅白それぞれのチームに属するJPYが自らの経験を生かして人員配置や声掛けを考えてFPYに共有し、チーム一丸となって取り組んだ。玉入れは、イベント委員会メンバーが持つ紅白各チームの箱に紙製の玉を入れる方式で実施され、会場は大いに盛り上がった。

競技の合間には、司会を務めるイベント委員から、勝っても負けても相手を称え尊重する意識についてのアナウンスが行われ、PY同士が互いを思いやる心を持つきっかけとなった。

フェアウェル・フェスティバル

フェアウェル・フェスティバルでは、プログラム中に

輝いていたPYを互いの投票で選出するSWY Award、有志のPYで撮影された船内活動の様子をまとめたビデオ上映、SWY37に関するクイズ大会が行われた。クイズ大会の後にはダンスパーティーが開催され、思い思いにダンスを楽しんだ。ダンスパーティーを挟んだ後半では、有志参加青年によるSWY Gleeにより、誰もが知る著名なミュージカルの歌や踊りが多数披露され、会場は大いに盛り上がりを見せた。

最後はイベント委員会メンバーからのスピーチの後、「The Nights」と「We are the world」を参加者全員で歌ってフェスティバルは終了した。「The Nights」は「後悔の

ない人生を送り、記憶に残るような生き方をしよう」というメッセージをもつスウェーデン出身の歌手Aviciiの名曲であり、近年SNSを通じて世界中の青年層に注目されている曲である。「We are the world」は史上最も有名ともいわれるチャリティーソングであり、生まれた国は違えども世界は一つであり助け合う家族であるというメッセージを持つ。「We are the world」歌唱時には全員が大きな一つの輪になり、約1か月に及ぶ航海に思いを馳せながら、声を合わせて歌った。にっぽん丸船上最後の「世界青年の船」事業として、参加者全員の記憶に残るイベントとなった。

5.4. ナショナル・プレゼンテーション委員会

ナショナル・プレゼンテーション委員会は、ナショナル・プレゼンテーション (NP) の運営を行う委員会である。この委員会はNPのリハーサルやNP上演中の機材の操作や設定の役割を担った。委員会はNPでのルールを決め、参加青年が公平かつ安全に発表を行えるように努めた。

各代表団は、それぞれのスタイルや特色を活かして、自国の文化を余すところなく伝え、準備に費やした多大な努力と熱意が客観的にも強く感じられるものとなった。

NPの持ち時間は、外国参加国は20分、日本は30分と限られた時間内であったが、参加青年は自国の文化や歴史を凝縮して披露し、再発見する貴重な機会となった。参加青年は各国のNPを尊重し、それを通して異なる文化や社会的背景への理解を深めた。NPのリハーサルから本番に至るまで、NP委員会と各国のNP担当が密接に連携し、すべてのNPを無事に実施することができた。

5.5. ピア・ラーニング・セミナー委員会

ピア・ラーニング・セミナー (PLS) 委員会は、PLS全体のスケジュール管理や運営方法について検討し、ガイドラインの策定、開催場所や開催時間の調整を行っ

た。必要に応じて、事前に委員会と主催者で協議を行い、PLS当日には、委員会のメンバーが各PLSにサポーターとして参加し、円滑な運営を支援した。

6 クラブ活動

クラブ活動は、参加青年個人または数名のグループにより、自らの関心や専門性を活かした活動を自由に企画し、参加者を募り、実践する活動である。これにより参加青年は自らの考えや思いを発信、企画、実践する力を養うことができ、国やCD、LGの枠を超えて活発に交流することができた。

＜クラブ活動の例＞

- ギリシャの伝統舞踊と音楽
- 静と動 — 空手と書道
- 剣道クラブ
- カリステニクス・トレーニング (自重トレーニング体験)
- 日本茶道体験 — 抹茶クラブ
- ザ・タバーン (交流スペース)

- ドミニカ共和国のスペイン語101: 文化・言語・日常生活
- ウブントゥ
- アオテアロア (ニュージーランド) — ハカ in 日本
- チリダンスレッスン
- ベラウ (パラオ) クラブ
- 空手を通じた日本の精神体験
- ジャマイカの味: 小さいけれど力強い
- SWYライブラリー
- ビーズクラブ (ビーズアクセサリーづくり)
- ボディパーカッションの芸術
- お琴クラブ
- 楽しく日本語を学ぼう

- 日本茶体験
- モンゴル書道

- 浴衣着付けワークショップ
- ラクロスの歴史と技術

7 事後活動セッション

Introduction

The Post Program Activities (PPA) session was conducted by two representatives of IYEO and two representatives from SWY Alumni Association (SWYAA Australia and SWYAA Peru). The purpose of PPA was to explain to PYs about the alumni associations, the current activities of the alumni and inspire and guide them in developing PPAs to be implemented after the conclusion of SWY37. It consisted of three sessions held over two days during the final days of their voyage onboard the Nippon Maru.

Session 1

Objectives:

- Inspire PYs about the purpose and importance of PPAs.
- Identify diverse examples of PPAs worldwide.
- Connect their personal passions and interests to their potential for social impact.

The facilitator team started the first session by sharing Human Centered Design and a panel about their experiences with project management. During the PPA session, the representatives started by explaining SWYAAs, IYEO, and Global Assembly. Next, each of them shared personal examples of past and ongoing PPAs they had participated in, collaborated on, or directed.

Next, key points of PPAs were addressed to PYs. The focus was on community contribution, engaging the SWY alumni, fostering international collaboration, and sustainability.

The session ended with PYs reflecting and sharing what skills they already have and which connections they already have.

Session 2

Objectives:

- Structure delegation PPA into a basic action plan using a model canvas.
- Schedule main activities to lead their project into reality using Gantt.

The second session began by explaining the model canvas and Gantt chart with the purpose of discussing and sharing their PPA projects as a delegation.

Once each delegation PPA was decided, each project was displayed to receive feedback and for PYs to show their interest to contribute to each other's idea.

PYs were encouraged to summarize and submit their PPAs to their alumni associations or directly to SWYAA International and IYEO to be featured in SWY News.

The proposed PPAs of each delegation go as follows:

Cameroon: To implement the “Peace empowerment and strategy” program, inspired by the culture of peace, remembrance, and resilience observed in Okinawa. The project will combine training, mentorship, and community micro-projects aimed at fostering social reintegration and economic empowerment in vulnerable areas.

Canada: To implement the SWY Junior Global Classroom Exchange connects junior and high school students from different countries through pen pal exchanges and virtual classroom conversations. Facilitated by SWY alumni, the program aims to help students learn directly from peers around the world and build greater cross-cultural understanding.

Chile: To host a workshop that will create a space for sharing information about international opportunities, the steps required to apply, and experiences from SWY. In addition, they aim to introduce different tools and resources for learning English, helping ensure that language is not a barrier when applying for international opportunities.

Dominican Republic: To formally establish the SWYAA Dominican Republic, which will work with likeminded associations and strategic partners in order to promote SWY values, incentivize Dominican Republic-Japan cooperation and guarantee strategic collaboration in future editions.

Greece: To launch a series of PPAs that activate the SWYAA of Greece and expand opportunities for young people in Greece, Europe but also beyond. In the short term, they plan to organize youth exchanges through the Erasmus+ program together with other alumni, as well

as local workshops in schools and youth organizations, working in collaboration with existing partners and the Ministry of Social Affairs. In the long term, these initiatives aim to empower young people and build the foundations for a new SWY-like international youth exchange program, supported by a mix of public and private partners/funds.

Jamaica: To preserve culture: Culture as Medicine through Jamaican Heritage and Holistic Health by examining how cultural retention promotes one’s overall health and wellbeing towards self-actualization and ultimately; sustainable development.

Japan (Hokkaido and Tohoku): To create safe, welcoming spaces where people of all ages and backgrounds—children, adults, elders, and people from around the world—can feel they belong. Through community gatherings and workshops, we aim to reduce loneliness and foster learning from diverse perspectives.

Japan (Tokyo①): To provide opportunities for youth in Japan to interact with people from different backgrounds and gain interest in SWY and international exchanges, strengthen connection among Ex-PYs. We will create a travel plan and invite Ex-FPYs to Japan. While we provide opportunities for them to learn more about Japan, we set discussion sessions to engage youth in Japan, gain interest and be aware of global issues.

Japan (Tokyo②): To develop “SWY Business Matching” an app that connects PYs who are running businesses with PYs who are interested in collaborating with them in a fun and engaging way. This will promote the creation of new business opportunities.

Japan (Kanto-Area without Tokyo, Kanagawa): To maintain a strong connection among PYs, including Ex-PYs, we aim to create a platform for PYs where we can compile their profiles (e.g., where they work and what they are currently doing)

Japan (Kanagawa): To share the lessons and international perspectives gained through SWY with students at Universities in Kanagawa and to inspire greater interest in an international exchange and new challenges among the next generation. We’ll explain the value of the SWY.

Japan (Kansai-Area): To strengthen and maintain connections between PYs and Ex-PYs in the Kansai

region. We aim to hold regular meetups to maintain contact among PYs. The gatherings will primarily be at restaurants offering international or ethnic cuisine, creating opportunities for continued cultural exchange and networking among members.

Japan (Tokai-Area): To create a community where professionals feel motivated to stay engaged and connect even during the busy intervals of their workdays. We aim to establish regular, casual opportunities for people to drop in, interact, and stay involved without a heavy time commitment.

Japan (Chugoku-Area): To make a place where everyone can host an event making a first step to their dreams, by this, we aim to facilitate PYs networking for future PPAs.

Japan (Shikoku, Kyushu, Okinawa Area): To increase the number of SWY participants from regional areas by conducting online NP sessions for people interested in participating in future SWY editions, and through revitalizing regional IYEO organizations.

Mongolia: To establish SWYAA Mongolia and start the “SWY Café” project afterwards. The project will consist of monthly workshops in the “SWYAA moving cafe” style, changing venues/cafes and styles each month for different cultural activities of SWY delegations. Having proper introductions to the specific cultural aspects and having hands-on activities will interest the youth in diversity, further enhancing their opportunities to join international exchange programs. The goal is to bring future PYs of Mongolia to SWY.

Mozambique: To equip Mozambican young people with the information about international youth exchange programs, including SWY, in order to expand their networking and contribute to their personal development, so that they can be competitive in the labor marketplace. To achieve this objective the SWY Alumni will promote workshops, round tables, recreational activities at high schools and universities as well as skills acquired during SWY37, such as Japanese culture (e.g., tea ceremony, shodo, yukata, and games).

New Zealand: To develop effective leadership programs among youth, through implementation of knowledge and SWY connections.

Palau: To implement the Tree-Planting Workshop. Palau's first-ever SWYers wish to continue engagement and showcase the inspiration and themes of SWY through a local tree planting workshop. Giving back to nature, giving an outlet and space for youth, and continuing the SWY spirit of planting seeds of change.

Spain: To reduce the lack of information about international opportunities and to encourage intercultural understanding through the implementation of several workshops in educational centers (rural, vocational training, etc.) across Spain while showcasing the values of Japanese culture.

Session 3

Objectives:

- Develop PPA proposal based on interest
- Connect with PYs from different countries
- Encourage international cooperation

The final session followed the same activity structure as the second one, this time, PYs were encouraged to form smaller groups based on their interests: SDGs, international exchange, SWY, youth support and education, regional revitalization, entertainment, and other topics.

Each group could propose a team project as a whole or divide it into smaller groups. Finally, they could explain briefly their ideas and ask for support and skills needed.

8 佐藤啓内閣官房副長官表敬訪問

令和8年3月12日17時20分より、内閣総理大臣官邸の小ホールにて表敬訪問を行った。

初めに、伊藤管理官の先導により、佐藤内閣官房副長官が各国参加青年代表の前方へと進まれ、各国ナショナル・リーダー及びユース・リーダーと順次握手を交わした。

その後、PY代表としてモザンビークYLが挨拶をし、続いて佐藤内閣官房副長官から挨拶をいただき、最後に、佐藤内閣官房副長官と参加青年の代表者の記念撮影を行った。

9 佳子内親王殿下御引見

令和8年3月12日11時より、赤坂東邸にて参加青年の代表者が佳子内親王殿下の御引見を賜った。

PY代表としてニュージーランドYLが挨拶を行った。その後、参加青年の代表者は、3～5か国ごとに三つのグループに分かれて内親王殿下と御懇談する機会を賜っ

た。

その後、佳子内親王殿下と参加青年の代表者の記念撮影を行い、最後に南内閣府大臣官房審議官（青年国際交流担当室長）が謝辞を述べた。

10 管理官報告

内閣府 国際調整官 伊藤信

今回の「世界青年の船」事業は、「東南アジア青年の船」事業から連続運航となった都合上、参加青年がタイに集結してバンコク港に停泊中の「にっぽん丸」に乗り込み、船内での活動が海外から始まるかたちをとった。寄港地活動を伴わないとはいえ、本事業で「にっぽん丸」が海外の港に停泊するのは令和元年度以来のことである。

バンコクからスタートしたことに伴う調整や留意点が多く発生したほか、事業の初動から、道中の航空便の遅延によって、一時、一部の国が出港に間に合うかわからないという状況になり、冷や汗をかいた。航空便確保に向けた関係者の御尽力もあって、幸い、出発日である2月16日の早朝までには全員が到着し、船は当初の予定どおり午後2時にバンコク港を発つことができた。

船内の雰囲気は、例年のような東京のプログラムでのウォーミングアップがなかったにもかかわらず、かなり早い段階から青年同士が打ち解け、交流が活発に行われていたように感じる。10か国以上の多様な背景を持つ青年たちが、短期間であっても濃密な日々を共に過ごそうと志をもって集まってきただけのことはある。参加国のナショナル・プレゼンテーションを、最初の寄港地である那覇港到着までという比較的早い段階に組んでいたこともあり、未踏の国々の文化や社会的背景に触れる機会が序盤から確保されていたのも、若干運営サイドの自賛となってしまうが、良かったのではないかと思う。

那覇及び名古屋の両寄港地では、入港関係の式典を開催する日が閉庁日に当たったこともあり、沖縄県及び愛知県の知事並びに名古屋市長には、表敬訪問という形ではなく、わざわざ船まで出向いていただき、現地実行委員会主催によるレセプションを挙行了した。

寄港地活動（沖縄県での地域訪問活動、愛知県での地域実践活動）については、既参加青年や有志による実行委員会の御尽力に加え、訪問先の皆様の多大なる御協力により、外国青年はもとより、日本青年にとっても大変意義深い学びの機会となったことと思う。沖縄県では7グループ、愛知県では8グループに分かれて活動を行ったが、訪問先の数の多さに加え、特に愛知県では、ディス

カッション課題のテーマに沿った訪問先選定が求められ、コース・ディスカッションを担当するファシリテーターとの連携も不可欠であった。複数の条件を満たしつつ、プログラムを構築・実施するに当たり、関係者の皆様は払われた御苦勞は想像に余りある。いずれのコース内容も興味深く、愛知でのプログラムの最後に県庁の佐野氏も言及されていたが、沖縄のプログラムを含め、同行しなかったコースも体験してみたかったという思いを強くした。

船内で実施されたピア・ラーニング・セミナーやクラブ活動についても、管理官として全てを回りきれたわけではないが、それぞれの活動には、参加青年が関心を寄せているテーマや各国の文化的背景が反映されており、青年主体の学びの場として機能していたように感じる。私自身も、クラブ活動の一環として自分の名前をモンゴル文字で書いてもらう機会があり、ささやかながらも文化交流の一端に触れることができた。

今回のプログラムは、「世界青年の船」事業としてのみならず、内閣府の国際交流事業において「にっぽん丸」を利用する最後の機会ともなった。名古屋港及び東京港で行われたオープンシップでは、既参加青年を始め船との別れを惜しむ方々の姿があちこちで見られ、この船が長年にわたり果たしてきた役割の大きさを改めて実感した。

事業の締めくくりの場などで何度も申し上げたが、事業を終えて感じる成果の大きさや内容は、参加青年一人ひとりによって異なるものであろう。大きな充実感を得た人には、その経験を自信として次の一步を踏み出してほしいし、期待したほどの成果を実感できなかった人には、その要因を自身なりに冷静に振り返り、将来に向けた糧としてもらいたい。どのような形であれ、参加青年が本事業で得た経験を踏み台として、それぞれの場で未来に向かって大きく羽ばたいていくことを、心より祈念している。

最後に、青年たちの目に触れないところ含め、今回の事業に参画し、お骨折りくださったすべての皆様への心からの御礼を申し上げて、報告を終えることとしたい。



關係資料

1 参加青年の構成

(1) デリゲーション別・年齢別PY数

年齢 デリゲーション	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	Total
カメルーン	0	0	2	1	0	1	0	1	0	0	2	1	0	8
カナダ	0	0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	0	8
チリ	0	1	0	0	0	1	0	1	3	0	0	2	0	8
ドミニカ共和国	0	0	0	1	1	1	2	1	0	1	1	0	0	8
ギリシャ	0	1	2	2	0	1	0	1	0	0	1	0	0	8
ジャマイカ	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	1	0	0	5
日本	5	9	14	14	9	8	3	2	3	2	5	2	2	78
モンゴル	0	1	3	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
モザンビーク	0	0	0	1	0	2	1	1	0	2	1	0	0	8
ニュージーランド	0	0	0	1	0	0	1	2	1	1	1	0	1	8
パラオ	1	2	1	0	1	1	0	0	1	1	0	0	0	8
スペイン	1	0	0	0	1	0	2	1	2	1	0	0	0	8
計	8	14	23	25	13	16	10	11	11	10	13	6	3	163

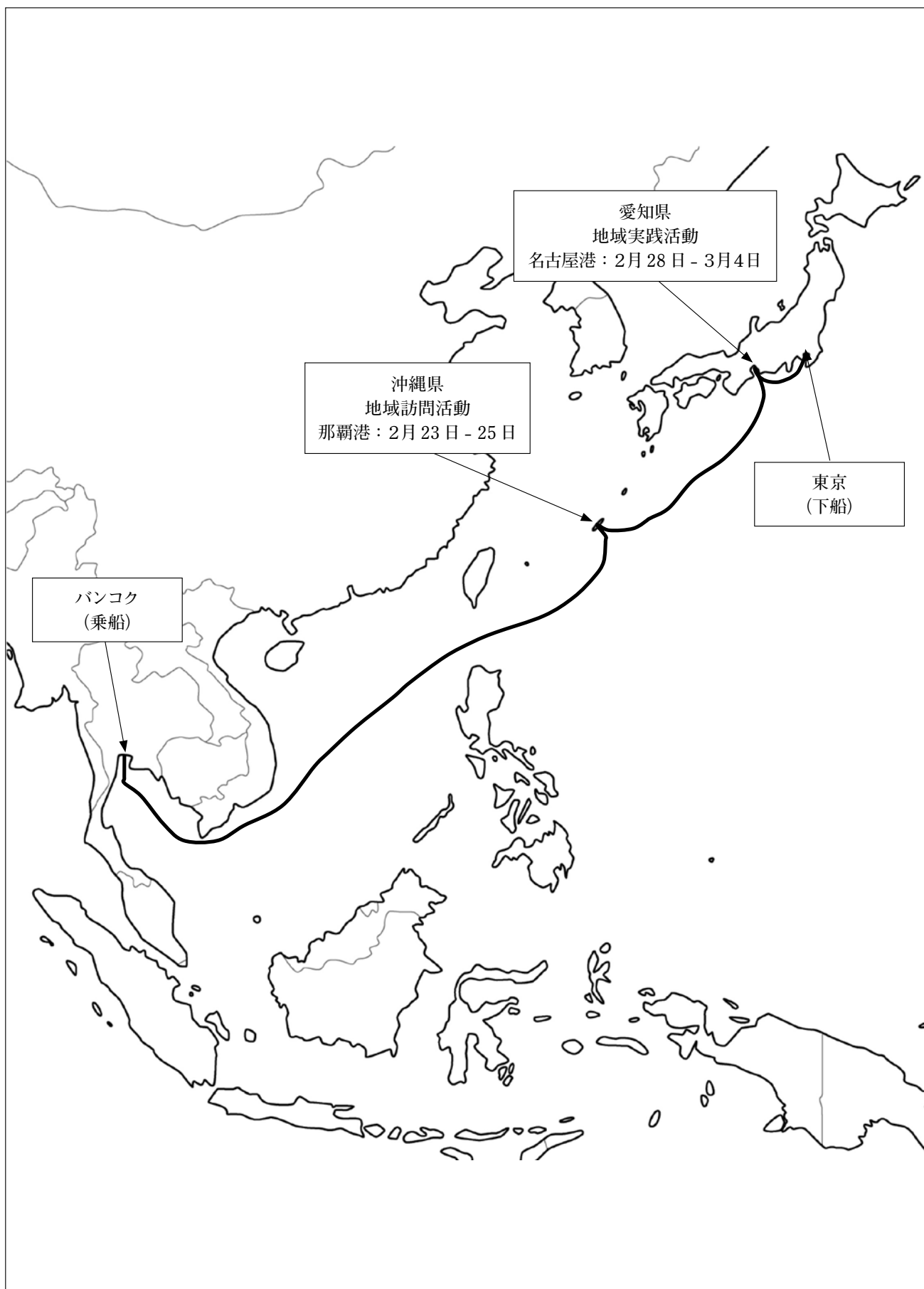
(注) 令和7年4月1日現在

(2) デリゲーション別・職業別PY数

職業 デリゲーション	公務員	会社員	教員	学生	その他	計
カメルーン	0	1	0	5	2	8
カナダ	0	3	0	2	3	8
チリ	0	4	1	1	2	8
ドミニカ共和国	3	4	0	0	1	8
ギリシャ	0	1	0	6	1	8
ジャマイカ	2	0	0	2	1	5
日本	1	11	1	63	2	78
モンゴル	0	0	0	8	0	8
モザンビーク	0	3	0	3	2	8
ニュージーランド	1	5	0	2	0	8
パラオ	4	1	0	2	1	8
スペイン	0	3	0	3	2	8
計	11	36	2	97	17	163

(注) 令和7年4月1日現在

2 航路図



4 事後活動

参加青年は、内閣府青年国際交流事業の貴重な体験をいかし、積極的に事後活動を行うものとしています。

事後活動は、一時的なものでなく、長期間にわたり継続的に行われていることが重要です。

(1) 「日本青年国際交流機構」の活動

日本青年国際交流機構 (International Youth Exchange Organization of Japan, 略称IYEO) は、昭和34 (1959) 年度から始まった内閣府 (旧総理府・旧総務庁) が行ってきた青年国際交流事業の既参加青年 (Ex-PY)、及び活動に賛同いただいた一般会員で組織されており、内閣府青年国際交流事業で得た成果を踏まえつつ、国際理解を深め、国際親善に寄与し、もって広く社会に貢献するとともに、会員相互の交流と研鑽を図ることを目的としています。

同機構は、現在約10,000名の会員を擁し、都道府県単位で行われる支部活動を始めとして、地域活動、本部活動と種々の活動を展開しています。

当事業の参加青年も、帰国後は同機構へ加入し、事後活動等を活発に行うことが期待されています。

(2) 団体活動等

参加青年の中には、既に青少年団体又はグループに所属している者も多く、これらの団体に所属し、各団体の行う諸活動に積極的に参加し、海外研修の体験をこれらの活動に反映していくことも重要です。また、地域及び職域における活動についても同様です。

(3) その他の活動

次のような活動は、所属団体又は日本青年国際交流機構の活動と重複することが多いので、事後活動として大切なものです。

- a. 参加青年が、参加年度ごとに集まる機会を持ち、情報交換を行うこと。
- b. 内閣府及び関係団体が主催して行う「青少年国際交流事業事後活動推進大会」及び「青少年国際交流を通して国際社会や地域社会への貢献を考えるつどい」へ参加すること。
- c. 内閣府、地方公共団体及び関係団体等が行う外国青年招へい事業等により来日する外国青年の受け入れに協力すること。参加青年として訪れた国の青年が来日する場合もあり、旧交を温める良い機会となる。
- d. 地域に在住する外国青年 (留学生・研修生等) との交流を定期的に行うこと。

5 既参加青年による事後活動組織設立への動きとその歴史

1. 「世界青年の船」事業既参加青年の国際的連携を目指して

昭和63 (1988) 年度に開始された「世界青年の船」事業は、令和6 (2024) 年度「世界青年の船」事業の参加青年を加えると、日本青年は延べ3,941人、外国青年は70か国で延べ4,838人となっています。これらの既参加青年たちは、事業で得た貴重な体験をいかして、地域、職場、学校等において国際交流活動、青少年活動を活発に行うことが期待されているほか、日本と参加各国との友好親善の懸け橋としての役割も期待されています。

各国の既参加青年の事後活動は、当初は基盤となる組織や資金、そして活動のノウハウが乏しく、積極的な活動展開が難しい状態でした。しかし、「世界青年の船」事業が回数を重ねるとともに既参加青年の層も厚くなり、情報が蓄積されたことと、インターネットの普及も影響して、グローバル・ネットワークの確立と社会貢献活動の活発化に向けて、少しずつ前進するようになりました。

寄港地、参加国共に固定されないという条件の下で、本格的な地球規模の活動を展開するための基盤の確立は難しい点もありながら、国際連携組織の確立を目指して活動を推進してきました。

2. 始まりはギリシャから

この構想の具体化の第一歩として挙げられるのは、平成6 (1994) 年2月に第6回「世界青年の船」事業の寄港国ギリシャのピレウスで行われた一つの集まりでした。これは、第4回事業に参加したハンガリーとスウェーデンの青年たちが日本の第4回事業の既参加青年と連絡を取り合い、ピレウスに入港中の船に集合したものです。事前の準備不足や資金不足、連絡の不徹底等によって、集まった人数は少人数にとどまり、具体的な会議も設定できない状況だったものの、今後の展開を図る上での貴重な経験となりました。

3. 「世界青年の船」事業既参加青年代表者会議

(インターナショナル・リユニオン)

このような経緯をたどり、正式なインターナショナル・リユニオンとして第1回「世界青年の船」事業既参加青年代表者会議(東廻りコース)が平成7(1995)年3月2日～3日の2日間にわたり、メキシコのアカプルコに寄港中の第7回「世界青年の船」事業船上で開催されました。この会議には、寄港国メキシコの既参加青年を始めとして第3回と第5回の既参加青年と第7回事業の参加青年の総計56名が参加し、親交を深めました。会議では、まず各国での事後活動組織の設立とそれを基盤とした各国内での活動の展開について議論が行われ、引き続いて日本と各国の事後活動組織の有機的な連携の方策と国際的なネットワークの構築について話し合われました。

その結果、第7回事業の参加青年によって、「世界青年の船」事後活動組織についての原案となる今後の活動に関する提案文が承認され、その後の組織化の第一歩が印されました。参加国ごとに3名のキーパーソンが決められ、今後のそれぞれの国における組織作りや各国との連携体制について定めた提案文の成果は、まず、エクアドルで事後活動組織が発足するという形になって現れ、その後も各国で次々と事後活動組織が設立されました。以後、インターナショナル・リユニオンは平成18(2006)年度までは、運航中の「世界青年の船」事業のいずれかの寄港地で開催されましたが、船上で行う2日間のプログラムとしては、メキシコのアカプルコで3回(1995、1997、1999)、アラブ首長国連邦のドバイ(1996)、オマーンのマスカット(1998)、南アフリカのケープタウン(1999)で各1回の計6回行われました。2000年からは船上会議と訪問国活動を含む4泊5日のイベントとなり、ニュージーランドのオークランド(2000)、カナダのバンクーバー(2002)、タンザニアのダルエスサラーム(2004)、オーストラリアのシドニー(2005)、そしてモーリシャスのポートルイス(2006)で各1回開催されました。平成13(2001)年10月にはケニア、平成19(2007)年2月にはフィジーで開催が予定されていましたが、それぞれ、「世界青年の船」事業の航路変更のため、中止となりました。

インターナショナル・リユニオンは、SWYAA (Ship for World Youth Alumni Association) 発足に伴い、平成

19(2007)年より名称を「SWYAA国際大会(英語名称: SWYAA Global Assembly)」と変え、事後活動協議会との同時開催で訪問国活動と関連しない時期に実施されるようになりました。

4. 「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議

(東廻りコース)の開催

平成8(1996)年1月16日～21日には、各国の国内活動にとどまらず、本格的な既参加青年の国際的ネットワークを作ることを目指して、第1回「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議が開催されました。この会議では、「世界青年の船」事後活動組織憲章の前身となる「世界青年の船」事後活動組織合意書(東)がまとめられ、「世界青年の船」事業東廻り13か国が合意書に署名しました。

5. 「世界青年の船」事業既参加者(西廻りコース)の組織化

それまでは、東廻りコースの既参加青年の活動が先行していましたが、平成8(1996)年3月1日、2日の両日、アラブ首長国連邦のドバイ寄港中の第8回「世界青年の船」事業の船上において、既参加青年代表者会議(西廻りコース)が開催されるに至り、東廻りコースの活動状況が説明されました。また、平成9(1997)年1月16日～21日には、第2回「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議(西廻りコース)が開催されました。本会議では、「世界青年の船」事後活動組織合意書(西)がまとめられ、「世界青年の船」事業西廻り14か国が合意書に署名しました。

6. SWYAA国際連盟設立へ

東西における事後活動組織の組織化の流れを受け、平成17(2005)年には全ての事後活動組織が共通の目標を持って活動に取り組むことを目的として、二つの合意書(東と西)は「世界青年の船」事後活動組織憲章という統一の憲章にまとめられ、SWYAA国際連盟が発足しました。

「世界青年の船」事後活動組織憲章は平成25(2013)年にSWYAA国際連盟憲章に改定され、「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議に参加した28か国が署名し、新しい憲章は平成26(2014)年1月1日に施行されました。(SWYAA国際連盟憲章はオフィシャルウェブサイトを参照)

6 SWYAA国際連盟について

1. SWYAA国際連盟とは

「世界青年の船」事業、グローバルリーダー育成事業、「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(以後、「世界青年の船」及び後継事業)で培われた精神を継続させることを目的に、各国で既参加青年のための組織が設立されています。SWYAA国際連盟(Ship for World Youth Alumni Association International)は事業で培われた異文化理解、国際協力、国際平和の実現に向けてのリーダーシップ精神を推進し、支援しています。

2. 参加国

令和7年3月現在、正式加盟27か国、準加盟8か国が登録しましたが、非加盟の関係国を加えると70か国が連携しながら、様々な社会貢献活動を展開しています。

3. 共通の使命と目標

1. 「世界青年の船」事業及び後継事業の既参加青年のネットワークを継続すること。
2. 加盟各国の友好関係を継続し、連携を強化すること。
3. 自国及び国際社会に貢献する活動に取り組むこと。
4. 自国及び加盟国において、社会に貢献するリーダーを育成すること。
5. 青少年分野を担当する自国政府との連携強化を図ること。
6. 加盟国の大使館との連携強化を図ること。特に日本大使館との連携強化を図ること。
7. 日本人のコミュニティとの関係を深めること。

4. 共通の任務

1. 地域若しくは世界規模で社会貢献、ボランティアの取組、開発の取組につながるような活動を企画すること。
2. 自国の会員のネットワークを強化すること。
3. 自国の会員及びSWYAA国際連盟加盟国の間で情報交換を強化すること。
4. 日本大使館とのコミュニケーションを図り定期的に活動報告をすること。
5. 「世界青年の船」事業の既参加青年と新しい参加青年とのコミュニケーションを図ること。
6. 今後、「世界青年の船」事業に参加する青年を支援すること。
7. 既参加青年の正確な情報を把握し、保管すること。

5. 活動内容

① SWY News

年1回発行される「世界青年の船」事業及び後継事業の事後活動関連の機関紙(英語)で、各国の事後活動組織の

活動や、世界各地の既参加青年からの近況報告などの記事が盛り込まれています。これまでに28号が発行され、内閣府とSWYAA Internationalのウェブサイトに掲載されています。

② SWYAA国際大会(通称:GA=Global Assembly)

運航中の「世界青年の船」事業の寄港地で開催していた既参加青年代表者会議(インターナショナル・リユニオン)を、平成19年度からはSWYAA国際大会(英語名称:SWYAA Global Assembly)に名称を変え、事後活動組織の活動が活発な国で年1回実施するようになりました。

この大会では、社会的な貢献活動を地域若しくは世界規模で推進し、またそのような活動を達成するための方策を協議する「事後活動協議会」を同時開催し、各国の事後活動の状況を集約し、成果を総括します。

- 第1回SWYAA国際大会 ギリシャ
(平成19年9月5日～9日)
- 第2回SWYAA国際大会 日本
(平成20年8月21日～24日)
- 第3回SWYAA国際大会 オーストラリア
(平成21年9月2日～6日)
- 第4回SWYAA国際大会 エジプト
(平成22年10月9日～12日)
- 第5回SWYAA国際大会 メキシコ
(平成23年9月28日～10月2日)
- 第6回SWYAA国際大会 バーレーン
(平成24年10月4日～8日)
- 第7回SWYAA国際大会 ペルー
(平成25年8月29日～9月2日)
- 第8回SWYAA国際大会 トルコ
(平成26年8月30日～9月3日)
- 第9回SWYAA国際大会 フィジー
(平成27年8月12日～16日)
- 第10回SWYAA国際大会 インド
(平成28年9月20日～24日)
- 第11回SWYAA国際大会 UAE
(平成29年11月5日～8日)
- 第12回SWYAA国際大会 トンガ
(平成30年11月19日～23日)
- 第13回SWYAA国際大会 ロシア
(令和元年8月31日～9月5日)
新型コロナウイルス感染症の世界的な感染症拡大を受けて、令和2年から令和4年は開催が見送られた。
- 第14回SWYAA国際大会 オマーン
(令和5年11月4日～9日)
- 第15回SWYAA国際大会 スウェーデン

(令和6年8月3日～7日)

- 第16回SWYAA国際大会エジプト
(令和7年11月22日～27日)

③ 「SWYの森 (SWY Forest)」

「世界青年の船」事業の第20回を記念した事後活動の一つとして立ち上がった「SWYの森 (SWY Forest)」プロジェクトは、オリジナルロゴを既参加青年から募集の上Tシャツを制作、販売し、制作経費を除く全額を世界での植林活動に充てるものです。これまでにインドネシア・バリ (平成20年)、日本・岩手県 (平成25年)、スペイン・グアダラハラ (令和5年) にて実施しました。

④ 「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議とは (通称: 既参加青年会議 Ex-PY Conference)

原則年1回、内閣府が実施するSWYAA代表者のための会議。「世界青年の船」及び後継事業参加各国におけるSWYAAの形成・充実とそれを基盤とした各国内での事後活動の展開について情報交換を行うとともに、各国及び日本の既参加青年の有機的な連携による国際的ネットワークの構築に向けた討議を行うことを目的としています。具体的には、SWYAAのネットワークを使って行う社会貢献活動や今後の事後活動の方向性、そして既参加青年がどのように事業に貢献できるかなどを話し合います。

これまでの会議の結果、ホームステイ・ネットワークの構築、事業に協力する既参加青年の指導官の推薦、参加青年のための事前準備マニュアルやナショナル・リーダーのためのハンドブックの作成、「世界青年の船」事業を紹介するための広報用キット (プロモーション・キット) の作成、メーリングリスト使用のためのルール作り、そして事業参加予定者のためにSWYAAが実施する事前研修のガイドライン作成、といった成果が挙がりました。また、国内と世界に広がる会員のネットワークを活用して文化交流を促進させるとともに、更なるネットワークの強化を目的とした「グローバル・フォト・コンテスト」も平成16年度より4回にわたって開催されました。このほか、平成17年度にはSWYAA共通のロゴを決めるコンテストを開催、平成18年度には異文化理解ハンドブックをデータ化しました。また、広報に使用できる公式ビデオ (10分版) も完成しました。平成19年度には「世界青年の船」20周年記念事業の一環として、「世界青年の船」事業の各回の歴史や情報を集約するウェブサイトの作成、SWYカレンダーの作成、チャリティ・ランチの実施及び環境保護活動として、「SWYの森 (SWY Forest)」の植林に取り組むことなどが約束されました。平成20年度には

国際支援活動として、ケニアで実施している国内避難民支援活動や、スリランカにおける就学支援に対して日本青年国際交流機構が協力することを約束しました。平成21年度から22年度にかけては、異文化理解教育のための教材を作り、「ホームステイ+1 (プラスワン)」という名称でホームステイ受け入れ時にあわせてボランティアなどの「+1 (プラスワン)」の体験もアレンジする取り組みを勧めることで合意しました。また、事業出身者でその後、功績を挙げた人の情報や、事業の意義についての参加青年の声を集約する動きも始まりました。

平成28年には加盟32か国の代表により共同声明が発表され、今後、以下の共通活動に取り組んでいく決意が示されました。

- (1) 「SWYAA自然災害復興支援 (SWYAA Natural Disaster Relief)」: 自然災害に見舞われた地域に対して、災害直後の支援から継続的な支援まで提供する。
- (2) 「将来のための教育 (Educate for Tomorrow)」: 恵まれない状況にいる子供たちに、教育の質の向上や教育の機会を与えるための活動を各国で実施する。
- (3) 「SWYの森 (SWY Forest)」: SWYの森の継続的発展を支援する。
- (4) 「献血週間 (Blood Donation Week)」: 献血への意識向上と、年1回のSWYAA献血週間の開催を促進する。
- (5) 「差別の無い機会 (Opportunities Without Discrimination)」: 「SWYの日」(1月18日) に、差別の撤廃と多様性受容促進に向けた国際的なソーシャルメディアキャンペーンに参加する。
- (6) 「ホームステイ・プラス・ワン (Homestay + 1)」: SWYの既参加青年が、他のSWY参加国を訪れた際に、ホスト側がホームステイと社会貢献の機会をセットで提供する。

平成31年の会議には11か国の参加者が集まり、SWY公式ロゴの制定、SWYAA国際大会の開催国決定手順の見直し、事業参加直後の参加青年のエンゲージメントの高め方等について話し合いました。

6. 叙勲受章者

以下の人物が、各国事後活動組織での長年の功績を讃えられ、叙勲を受章している。

- インド「世界青年の船」連盟会長 ラヴィ・チョプラ氏、旭日双光章 (2022年11月)
- ソロモン諸島「世界青年の船」連盟元会長 フランシス・デヴェ氏、旭日双光章 (2025年4月)

7 事業実績

「世界青年の船」事業実績

年度 (回)	参加国		期間		乗船者					
	訪問国(寄港地) 《給油・給水地》	訪問国以外の外国青年の 参加国	日本 国内活動	運航	日本 参加青年	外国 参加青年	団長 指導官	管理部	業務員 等	計
昭和 63 年度 (1)	米国(ホノルル) 《往路・復路》 メキシコ(アカプルコ) ベネズエラ(ラ・グアイラ) エクアドル(グアヤキル) 《パナマ-クリストバル》	オーストラリア、コロンビア、 コスタリカ、フィジー、 ホンジュラス、 ニュージーランド、パナマ	平成 1.1.9 ～1.18 10日間	平成 1.1.18 ～3.29 71日間	103 (1)	173 (11)	11 (2)	17	5	309
			計 80 日間							
平成 元 年度 (2)	インド(ボンベイ) エジプト(アレキサンドリア) ギリシャ(ピレウス) オマーン(マスカット) 《シンガポール》	西ドイツ、イタリア、 クウェート、モロッコ、 パキスタン、スリランカ、 チュニジア、 アラブ首長国連邦	平成 2.1.8 ～1.17 10日間	平成 2.1.17 ～3.28 71日間	100 (1)	168 (12)	12 (3)	17	5	302
			計 80 日間							
平成 2 年度 (3)	メキシコ(アカプルコ) 米国(ニュー・オルリンズ) ベネズエラ(ラ・グアイラ) コスタリカ(プンタレナス) 《ホノルル》	アルゼンチン、 オーストラリア、ブラジル、 カナダ、ドミニカ共和国、 フィジー、ペルー、トンガ	平成 3.1.8 ～1.18 11日間	平成 3.1.18 ～3.20 62日間	103 (1)	171 (12)	12 (3)	17	5	308
			計 72 日間							
平成 3 年度 (4)	スリランカ(コロンボ) エジプト(アレキサンドリア) スペイン(バルセロナ) オマーン(マスカット) 《シンガポール》	アルジェリア、 バングラデシュ、 ハンガリー、インド、 ケニア、スウェーデン、 トルコ、アラブ首長国連邦	平成 4.1.9 ～1.17 9日間	平成 4.1.17 ～3.18 62日間	101 (1)	167 (12)	9 (1)	17	6	300
			計 70 日間							
平成 4 年度 (5)	コスタリカ(プンタレナス) ドミニカ共和国(サント・ドミンゴ) 米国(サン・フランシスコ) ベネズエラ(ラ・グアイラ) 《ホノルル》	オーストラリア、チリ、 エクアドル、メキシコ、 ニュージーランド、 パプアニューギニア、 西サモア、ウルグアイ	平成 5.1.11 ～1.20 10日間	平成 5.1.20 ～3.22 62日間	103 (1)	175 (12)	11 (3)	17	6	312
			計 71 日間							
平成 5 年度 (6)	ギリシャ(ピレウス) インド(ボンベイ) ケニア(モンバサ) スリランカ(コロンボ) 《シンガポール》	エジプト、フィンランド、 ヨルダン、ネパール、 オマーン、セネガル、 アラブ首長国連邦、英国	平成 6.1.12 ～1.21 10日間	平成 6.1.21 ～3.22 61日間	114 (1)	161 (12)	9 (2)	17	7	308
			計 70 日間							
平成 6 年度 (7)	オーストラリア(ブリスベン) エクアドル(グアヤキル) フィジー(スバ) メキシコ(アカプルコ) 《ホノルル》	ブラジル、カナダ、 コロンビア、ジャマイカ、 ニュージーランド、 ソロモン、米国、ベネズエラ	平成 7.1.10 ～1.19 10日間	平成 7.1.19 ～3.21 62日間	112 (2)	179 (12)	9 (3)	17	8	325
			計 71 日間							
平成 7 年度 (8)	スリランカ(コロンボ) 南アフリカ共和国(ケープタウン) タンザニア(ダルエスサラーム) アラブ首長国連邦(ドバイ) 《シンガポール》	バングラデシュ、ベルギー、 エジプト、ケニア、 ノルウェー、ポーランド、 カタール、イエメン	平成 8.1.10 ～1.19 10日間	平成 8.1.19 ～3.19 61日間	114 (2)	164 (12)	10 (4)	17	7	312
			計 70 日間							
平成 8 年度 (9)	ニュージーランド(オークランド) チリ(バルパライソ) コスタリカ(カルデラ) メキシコ(アカプルコ) 《ホノルル》	オーストラリア、カナダ、 エクアドル、フィジー、 ペルー、トンガ、米国、 ベネズエラ	平成 9.1.11 ～1.20 10日間	平成 9.1.20 ～3.21 61日間	118 (2)	185 (12)	8 (2)	17	7	335
			計 70 日間							
平成 9 年度 (10)	セーシェル(ヴィクトリア) ケニア(モンバサ) ヨルダン(アカバ) オマーン(マスカット) 《シンガポール》	バーレーン、エジプト、 ギリシャ、インド、 南アフリカ、スリランカ、 スウェーデン、 アラブ首長国連邦、 英国、タンザニア	平成 10.1.11 ～1.20 10日間	平成 10.1.20 ～3.19 59日間	116 (2)	178 (13)	10 (3)	17	8	329
			計 68 日間							

年度 (回)	参加国		期間		乗船者					
	訪問国 (寄港地)	訪問国以外の外国青年の 参加国	日本 国内活動	運航	日本 参加青年	外国 参加青年	団長 指導官	管理部	業務員 等	計
平成 10 年度 (11)	ソロモン (ホニアラ) トンガ (ヌクアロファ) エクアドル (グアヤキル) メキシコ (アカプルコ) 《タヒチ、ホノルル》	オーストラリア、カナダ、 フィジー、ニュージーランド、 ペルー、米国、 ウルグアイ、ベネズエラ	平成 11.1.11 ～1.19 9日間	平成 10.1.19 ～3.16 57日間	116 (2)	155 (12)	8 (4)	17	9	305
			計 65 日間							
平成 11 年度 (12)	セーシェル (ヴィクトリア) 南アフリカ (ケープタウン) タンザニア (ダルエスサラーム) アラブ首長国連邦 (ドバイ) 《シンガポール》	オーストラリア、バーレーン、 ベルギー、カナダ、 エジプト、インド、メキシコ、 ノルウェー、ペルー、 カタール、スペイン、トルコ	平成 11.8.31 ～9.9 10日間	平成 11.9.9 ～10.28 50日間	122 (2)	141 (17)	9 (3)	17	10	299
			計 59 日間							
平成 12 年度 (13)	ロシア (ウラジオストク) 米国 (ホノルル) トンガ (ヌクアロファ) ニュージーランド (オークランド) 《タヒチ、シンガポール》	カナダ、チリ、コスタリカ、 エクアドル、フィジー、 メキシコ、オランダ、 パラグアイ、スペイン、 タンザニア、ベネズエラ	平成 12.8.28 ～9.5 9日間	平成 12.9.5 ～10.23 49日間	117 (2)	135 (15)	10 (3)	16	12	290
			計 57 日間							
平成 13 年度 (14)	フィジー (スバ) ニュージーランド (オークランド) シンガポール (シンガポール) タイ (バンコク) 《サイパン》 ※ 訪問国からの参加青年 はなし	オーストラリア、バーレーン、 ブラジル、エジプト、 フィンランド、ギリシャ、 インド、ケニア、 モーリシャス、南アフリカ、 スリランカ、 アラブ首長国連邦、 英国、米国	平成 13.10.17 ～10.25 9日間	平成 13.10.25 ～12.13 50日間	119 (2)	139 (14)	7 (3)	14	11	290
			計 58 日間							
平成 14 年度 (15)	オーストラリア (ケアンズ) 米国 (ホノルル) カナダ (バンクーバー)	カメルーン、チリ、フィジー、 メキシコ、ニュージーランド、 スペイン、スリランカ、 トンガ、ベネズエラ	平成 14.10.22 ～10.31 10日間注	平成 14.10.31 ～12.13 44日間	117 (2)	130 (12)	9 (3)	15	10	281
			計 53 日間							
平成 15 年度 (16)	インド (ムンバイ) タンザニア (ダルエスサラーム) セーシェル (ヴィクトリア) 《シンガポール》	バーレーン、エジプト、 ニュージーランド、 ノルウェー、ペルー、 ロシア、ソロモン、 アラブ首長国連邦、米国	平成 16.1.13 ～1.21 9日間	平成 16.1.21 ～3.3 43日間	124 (2)	134 (12)	11 (4)	14	10	293
			計 51 日間							
平成 16 年度 (17)	オーストラリア (シドニー) ニュージーランド (ウェリントン) フィジー (スバ) 《サイパン》	カナダ、コスタリカ、 ケニア、モーリシャス、 メキシコ、ポーランド、 トルコ、米国、ベネズエラ	平成 17.1.11 ～1.19 9日間	平成 17.1.19 ～3.2 43日間	120 (2)	140 (12)	9 (6)	13	13	295
			計 51 日間							
平成 17 年度 (18)	インド (チェンナイ) ケニア (モンバサ) モーリシャス (ポートルイス) 《シンガポール》	オーストラリア、 バーレーン、ブラジル、 カナダ、ギリシャ、 モロッコ、スウェーデン、 トンガ、アラブ首長国連邦	平成 18.1.10 ～1.19 10日間	平成 18.1.19 ～3.2 43日間	118 (2)	132 (12)	10 (5)	13	13	286
			計 52 日間							
平成 18 年度 (19)	オーストラリア (ブリスベン、シドニー) ニュージーランド (ウェリントン) 《バヌアツ》	カナダ、チリ、エジプト、 フィジー、メキシコ、 オマーン、ロシア、 セーシェル、ソロモン、 トンガ、英国、イエメン	平成 19.1.16 ～1.25 10日間	平成 19.1.25 ～3.8 43日間	117 (2)	135 (13)	8 (5)	14	13	287
			計 52 日間							
平成 19 年度 (20)	オマーン (マスカット) インド (チェンナイ) 《シンガポール》	バーレーン、ブラジル、 コスタリカ、フィンランド、 ニュージーランド、ソロモン、 南アフリカ、スペイン、 タンザニア、米国、バヌアツ	平成 20.1.15 ～1.24 10日間	平成 20.1.24 ～3.5 42日間	116 (2)	134 (13)	8 (4)	27		285
			計 51 日間							

注：平成14年度(第15回)の日本国内活動には、航空機を使ったシンガポールへの移動日を含む。

年度 (回)	参加国		期間		乗船者						
	訪問国(寄港地) 《給油・給水地》	訪問国以外の外国青年の 参加国	日本 国内活動	運航	日本 参加青年	外国 参加青年	指導官	管理部	業務員 等	計	
平成 20 年度 (21)	トンガ(ヌクアロファ) ニュージーランド(オークランド) 《バヌアツ》	カナダ、エジプト、フィジー、 モーリシャス、ノルウェー、 ペルー、アラブ首長国連邦、 バヌアツ、ベネズエラ、 イエメン	平成 21.1.14 ～1.23 10日間	平成 21.1.23 ～3.3 40日間	108 (2)	138 (12)	7 (2)		28	281	
			計49日間								
平成 21 年度 (22)	アラブ首長国連邦(ドバイ) インド(チェンナイ) 《シンガポール、那覇》	オーストラリア、バーレーン、 エクアドル、エジプト、 ギリシャ、ケニア、オマーン、 スリランカ、トルコ、イエメン	平成 22.1.12 ～1.22 11日間	平成 22.1.22 ～3.5 43日間	130 (2)	138 (12)	9 (3)		31	308	
			計53日間								
平成 22 年度 (23)	フィジー(スバ) オーストラリア(ブリスベン) 《ソロモン、バヌアツ、那覇》	バーレーン、ブラジル、チリ、 メキシコ、ミクロネシア、 オマーン、ソロモン、 スウェーデン、タンザニア、 バヌアツ	平成 23.1.11 ～1.21 11日間	平成 23.1.21 ～3.2 41日間	126 (2)	136 (12)	8 (4)		30	300	
			計51日間								
平成 23 年度 (24)	インド(チェンナイ) スリランカ(コロンボ) 《シンガポール、那覇》	バーレーン、ブラジル、 カナダ、エジプト、 ニュージーランド、ペルー、 ロシア、スペイン、トルコ、 ベネズエラ	平成 24.1.18 ～1.31 14日間	平成 24.1.31 ～3.5 35日間	129 (2)	131 (12)	8 (4)		29	297	
			計48日間								
年度 (回)	参加国		期間			乗船者					
	訪問県 (寄港地)	外国青年の 参加国	日本国内 活動	運航	訪問国活動 (日本参加 青年のみ)	日本 参加青年	外国 参加青年	指導官	管理部	業務員 等	計
平成 24 年度 (25)	沖縄県(那覇) 兵庫県(神戸) 岩手県(大船渡)	バーレーン、チリ、コスタリカ、 フィジー、ケニア、メキシコ、 ニュージーランド、スリランカ、 トルコ、アラブ首長国連邦	平成 25.1.23 ～2.4 13日間	平成 25.2.4 ～2.22 19日間	平成 25.2.22 ～3.1 8日間	116 (2)	95 (10)	5 (2)		28	244
			計38日間								
計						2,879 (44)	3,734 (310)	227 (81)		641	7,481

グローバルリーダー育成事業実績

年度	参加国		期間				乗船者					
	訪問県 (寄港地)	外国青年の 参加国	日本国内 活動 (外国参加青年)	陸上研修 (全参加青年)	船上研修 (全参加青年)	海外研修 (日本参加 青年のみ)	日本 参加青年	外国 参加青年	研修 アドバイザー等	管理部	業務員 等	計
平成 25 年度	宮城県 (石巻)	バーレーン、ブラジル、 フィジー、インド、 メキシコ、 スウェーデン、 タンザニア、トルコ	平成 26.1.22 ～1.26 5日間	平成 26.1.27 ～2.3 8日間	平成 26.2.4 ～2.12 9日間	平成 26.2.12 ～2.20 9日間	87 (2)	71 (8)	1		23	182
			合計30日間									

グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」実績

年度	参加国		期間				乗船者					
	訪問県 (寄港地)	外国青年の 参加国	日本国内 活動 (外国参加青年)	陸上研修 (全参加青年)	船上研修 (全参加青年)	海外研修 (日本参加 青年のみ)	日本 参加青年	外国 参加青年	研修 アドバイザー等	管理部	業務員 等	計
平成 26 年度	沖縄県 (那覇) 岩手県 (大船渡)	バーレーン、ブラジル、 インド、ケニア、 ニュージーランド、 オマーン、ペルー、 スリランカ、トルコ、 英国	平成 27.1.21 ～1.25 5日間	平成 27.1.26 ～2.1 7日間	平成 27.2.2 ～2.13 12日間	平成 27.2.13 ～2.21 9日間	108 (2)	96 (10)	2		26	232
			合計32日間									

次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」実績

年度	参加国		期間			乗船者					計
	訪問国 (寄港地) 《給油・給水地》	訪問国以外の参加国	日本国内 活動 (外国参加青年)	陸上研修 (全参加青年)	船上研修 (全参加青年)	日本 参加青年	外国 参加青年	団長・ アドバイザー	管理部	業務員 等	
平成 27年 度	インド (チェンナイ) スリランカ (コロンボ) 《シンガポール》	オーストラリア、バーレーン、 チリ、メキシコ、ニュージーランド、 ロシア、タンザニア、 アラブ首長国連邦	平成 28.1.14 ～ 1.19 6日間	平成 28.1.20 ～ 1.26 7日間	平成 28.1.27 ～ 2.29 34日間	121 (2)	112 (10)	5 (1)	25	263	
			計 47日間								
平成 28年 度	ニュージーランド (オークランド) フィジー (スバ) 《バヌアツ、 ソロモン諸島》	ブラジル、カナダ、コスタリカ、 エジプト、インド、ケニア、 トンガ、ウクライナ	平成 29.1.17 ～ 1.22 6日間	平成 29.1.23 ～ 1.28 6日間	平成 29.1.29 ～ 3.3 34日間	118 (2)	116 (10)	5 (1)	25	264	
			計 46日間								

平成 29 年度「世界青年の船」事業実績

年度	参加国		期間			乗船者					計
	訪問国 (寄港地) 《給油・給水地》	訪問国以外の参加国	日本国内 活動 (外国参加青年)	陸上研修 (全参加青年)	船上研修 (全参加青年)	日本 参加青年	外国 参加青年	アドバイ ザー	管理部	業務員 等	
平成 29年 度	インド (コチ) スリランカ (コロンボ) 《シンガポール》	オーストラリア、メキシコ、 モザンビーク、オマーン、ペルー、 ポーランド、南アフリカ、 スペイン	平成 30.1.16 ～ 1.21 6日間	平成 30.1.22 ～ 1.27 6日間	平成 30.1.28 ～ 3.2 34日間	125 (2)	117 (10)	3	30	275	
			計 46日間								

明治 150 年記念「世界青年の船」事業実績

年度	参加国		期間			乗船者					計
	訪問国 (寄港地) 《給油・給水地》	訪問国以外の参加国	日本国内 活動 (外国参加青年)	陸上研修 (全参加青年)	船上研修 (全参加青年)	日本 参加青年	外国 参加青年	管理部	業務員 等		
平成 30年 度	沖縄 (那覇) オーストラリア (ダーウィン) オーストラリア (ブリスベン) 《パラオ》 《ソロモン諸島》	チリ、エクアドル、ギリシャ、 ソロモン、スウェーデン、 タンザニア、トルコ、 アラブ首長国連邦、 バヌアツ	平成 31.1.15 ～ 1.20 6日間	平成 31.1.21 ～ 1.26 6日間	平成 31.1.27 ～ 3.1 34日間	124 (2)	116 (10)	34	274		
			計 46日間								

令和元年度「世界青年の船」事業実績

年度	参加国		期間			乗船者					計
	訪問国 (寄港地) 《給油・給水地》	訪問国以外の参加国	日本国内 活動 (外国参加青年)	陸上研修 (全参加青年)	船上研修 (全参加青年)	日本 参加青年	外国 参加青年	管理部	業務員 等		
令和 元年	メキシコ (エンセナーダ) 《ハワイ》	バーレーン、ブラジル、 エジプト、フランス、英国、 ケニア、ニュージーランド、 ペルー、スリランカ	令和 2.1.10 ～ 1.11 2.21 ～ 2.24 6日間	令和 2.1.12 ～ 1.14、 2.18 ～ 2.20 6日間	令和 2.1.15 ～ 2.18 35日間	115 (2)	112 (10)	34	261		
			計 47日間								

令和3年度「世界青年の船」事業 (オンライン) 実績

年度	外国参加青年の参加国	オンライン交流	日本 参加青年	外国 参加青年	事務局員 等	計
令和 3年 度	オーストラリア、ニュージーランド、オマーン、ポーランド、ロシア、 南アフリカ、スリランカ、スウェーデン	令和 4.1.15, 1.22, 1.29, 2.12 4日間 計 4日間	39	37	5	81

令和4年度「世界青年の船」事業（ハイブリッド）実績

	外国参加青年の参加国	オンライン交流	仮想空間における交流	対面交流 (日本国内活動)	日本参加青年	外国参加青年	事務局員等	計
令和4年度	オーストラリア、バーレーン、ブラジル、カナダ、メキシコ、オマーン、ペルー、ポーランド、南アフリカ、スウェーデン	令和 4.11.26, 11.27, 12.3, 12.4, 12.10, 12.11 6日間	令和 4.11.19 ~ 12.28 40日間	令和 5.2.7 ~ 2.21 15日間	53 (2)	90 (10)	34	177

令和5年度「世界青年の船」事業実績

	外国参加青年の参加国	オンライン交流	オンラインツールにおける交流	対面交流 (日本国内活動)	日本参加青年	外国参加青年	事務局員等	計
令和5年度	アルゼンチン、エチオピア、フランス、インド、アイルランド、ヨルダン、ケニア、メキシコ、ニュージーランド、ソロモン諸島、トルコ、UAE、ザンビア	令和 5.11.4, 11.5, 11.11, 11.12, 11.25, 11.26 6日間	令和 5.11.4 ~ 2.29 118日間	令和 5.1.24 ~ 2.21 29日間	93 (2)	130 (13)	47	270

令和6年度「世界青年の船」事業実績

	外国参加青年の参加国	オンライン準備会合	オンラインツールにおける交流	対面交流 (日本国内活動)	日本参加青年	外国参加青年	管理部	計
令和6年度	アルジェリア、オーストラリア、ブラジル、ジブチ、エジプト、オマーン、パナマ、ペルー、ポーランド、セネガル、スリランカ、スウェーデン	令和 6.12.7	令和 6.12.9 ~ 2.28 81日間	令和 7.1.24 ~ 2.21 29日間	79 (2)	107 (12)	39	225

令和7年度「世界青年の船」事業実績

	外国参加青年の参加国	対面交流	日本参加青年	外国参加青年	管理部	計
令和7年度	カメルーン、カナダ、チリ、ドミニカ共和国、ギリシャ、ジャマイカ、モンゴル、モザンビーク、ニュージーランド、パラオ、スペイン	令和 8.2.15 ~ 3.13 28日間	80 (2)	96 (11)	43	219

	日本参加青年	外国参加青年	団長・指導官・研修アドバイザー等	管理部・業務員・事務局員等	計
全事業の参加者合計人数	4,021 (66)	4,934 (424)	243 (83)	1,006	10,204

注：日本参加青年及び外国参加青年の欄における（ ）内は、ナショナル・リーダーの数の再掲である。

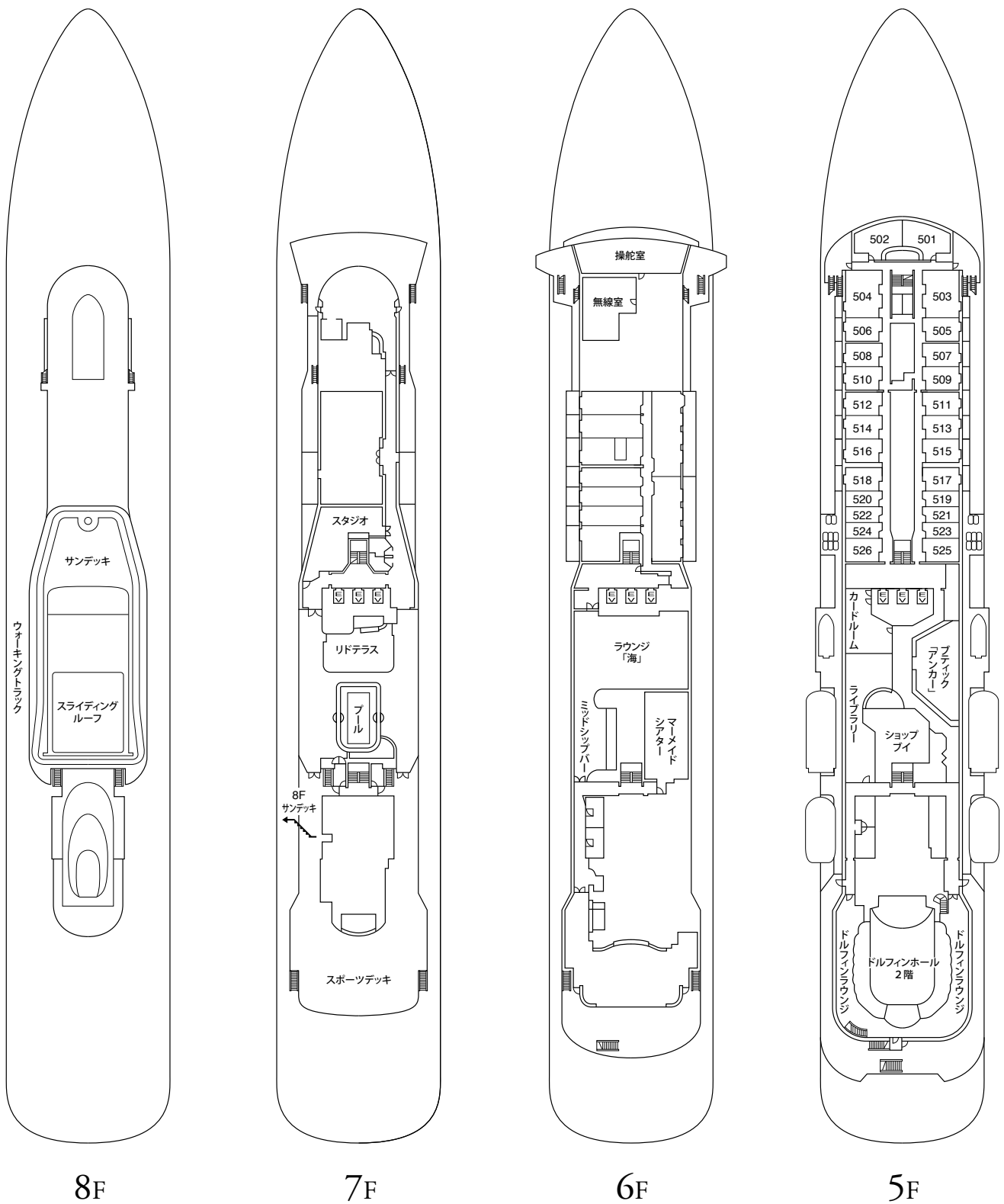
団長、指導官の欄における（ ）内は、外国人の数の再掲である。

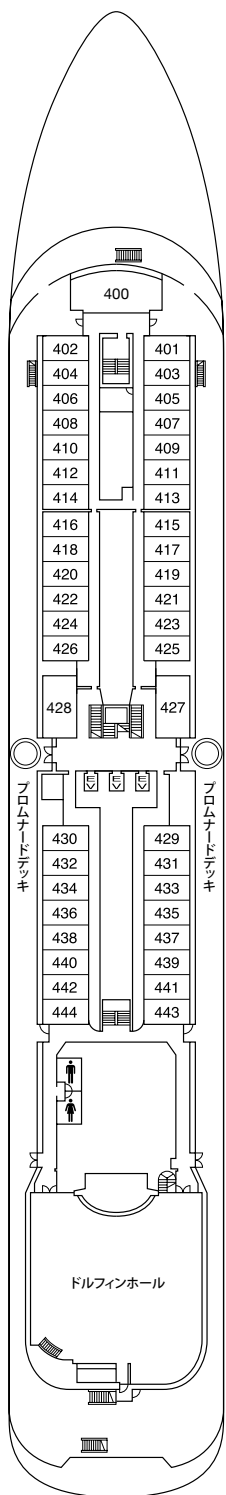
《 》内は、給油・給水及び参加青年の下船等の理由で寄港した地である。

下線で示した国は、日本参加青年が航空機で訪問した国である。

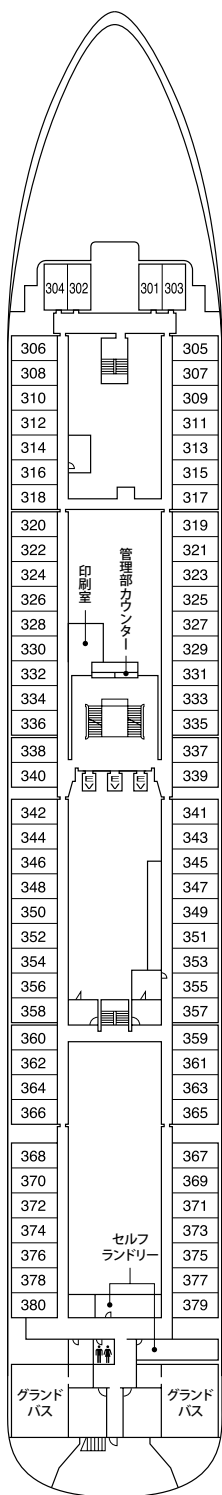
期間の中に日本参加青年の出航前・帰国後・事後研修は含まない。

8 にっぽん丸船内配置図

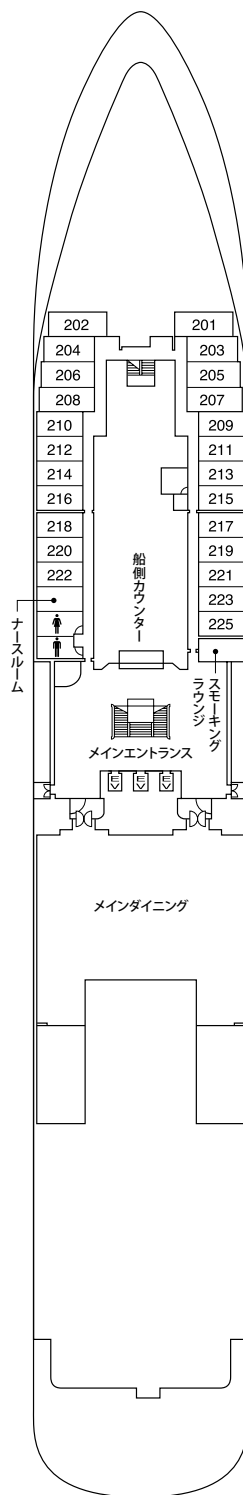




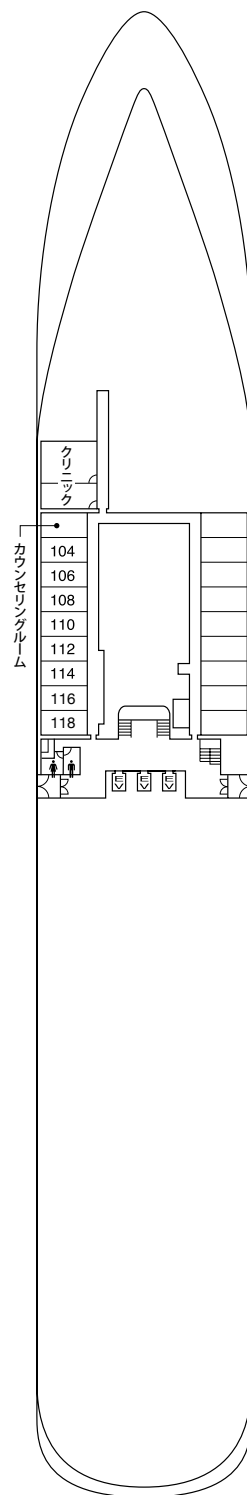
4F



3F



2F



1F

内閣府青年国際交流事業報告書
令和7年度 第37回
「世界青年の船」事業

発行 内閣府
〒100-8914
東京都千代田区永田町1-6-1
TEL: 03-6257-1433
URL: <https://www.cao.go.jp/koryu/>

編集 一般財団法人青少年国際交流推進センター
〒103-0013
東京都中央区日本橋人形町2-35-14
東京海苔会館6階
TEL: 03-3249-0767
URL: <https://www.centerye.org/>
編集協力 日本青年国際交流機構
URL: <https://www.iyeo.or.jp/>

内閣府青年国際交流事業報告書

令和7年度 第37回

「世界青年の船」事業